統一第百十四號

軍人慰問の巻

（明治三十年二月廿四日第三種郵便物認可
明治三十七年九月十五日發行統一第百十四號毎月一回十五日）

御雛附そく
人形
小道具

武者人形
東羽子板

御注文に依り調製致候

東京日本橋通り十軒店
久月本店
中原福藏
（電話本局二千三百八十二番）

（明治三十年二月廿四日第三種郵便物認可 毎月一回
全三十七年八月十五日發行統一第百十三號 十五日）

廣告

會計上整理の都合有之候に付誌代滯納の方は至急御拂込相成度希上候也

明治三十七年八月

東京淺草區南松山町
統一團

一本誌は毎月一回十五日を以て發行期日とす
一本誌は一冊六錢 十二冊前金六十五錢 郵券代用は一割增但五厘切手を眞とす
一讀讀申込の節は住所姓名を階書にて認めらるべし
一爲替局は淺草區北松山町として御振り込の事
一本圖は別に領收書を發せず但し領收證を要する向は返信料を封入するか或は爲替振込の節携渡濟通知料貳錢を振出郵便局へ納付すべし
一廣告料は五號活字廿七字詰毎一行金八錢なり

明治卅七年八月十五日印刷發行

發行人 井村恂也
編輯人 山根顯道
印刷人 鈴木曄學
印刷所 北澤活版所

發行所 統一團
東京市淺草區南松山町四十五番地

發行所東京市淺草區南松山町四十五番地 統一團

聽け文殊師利、譬ば強力の轉輪聖王の威勢を以て諸國を降伏せんと欲するに諸の小王其命に順はず、其時に轉輪聖王自ら種々の兵を起して征て討伏する時、兵衆の戰ふて功ある者を見て大いに歡善して功に隨つて賞賜として或は田宅聚落城邑を與へ、或は衣服嚴身の具を與へ、或は種々の珍寶金銀璃瑠硨磲碼碯珊瑚琥珀象馬車乘奴婢人民を與ふ、唯髻の中の明珠のみ之を與へず、りのゆゑは獨り王の頂上に此一の珠あり、若之を與なば王の諸の眷屬必ず大に驚き怪まんが如し、聖け文殊師利、如來も亦かくの如し、禪定智慧の力を以て法の國土を得て三界に王たり、然を諸の魔王敢て順伏せず、如來即はち賢聖の諸將と丶もに此魔王と戰ふ、其功あるものには心に歡喜して四衆の中に於て爲に諸經を說て其心を悅こばしめ賜ふに禪定の解脫無漏根力の諸法の財を以てし、また涅槃の城を與へて滅度を得たりといつて其心を引導して皆歡喜せしむ而もいまだ此法華經を說かず、文殊師利轉輪王の諸の兵衆の大功あるものを見ては心甚だ歡喜して此難信の球の久く髻の中に在て妄に人に與わざるを今與うるが如く、如來も亦かくの如し、三界の中に大法王として法を以て一切衆生を敎化す賢聖の軍の五陰魔煩惱魔死魔と共に戰ふて大功勳あり三毒を滅し三界を出で丶魔網を破するを見ては如來大いに歡び給ひ此法華經を說て能く一切衆生をして一切智に至らしめ給ふ、一切世間に怨多くして信じ難し、先きに說かざる所を今說く、聽け文殊師利、此法華經は是諸の如來の第一の說諸說の中に於て最もこれ甚深なり、末後に賜與すること彼の强力の王の久しく護れる明珠を今與ふるが如し、

（法華經安樂行品の一節）

我日本の柱とならん

本多日生

一 軍國民と宗教

今成乾隨

一 予か愛國心を表白して軍人諸君に信仰を勸む

古定賢正

一 軍人に與ふる信仰及安心

木村義明

一 死の前

窪田純榮

一 大日蓮の宗教より見たる日露戰爭

如有勇健能爲難事

我日本の大船とならん

王解髻中明珠賜之

軍人慰問の巻

軍國民と宗教

大僧正　本多日生

軍國民は敵對觀念の上に於て一切の行爲を活現せんとす、則ち勝敗を爭ふの國民なり、武裝を解かざるの國民なり、凱歌を奏せずんば歇まざるの國民なり、宗教は博愛思想を本領とし一切の行爲を德化せんとす、則ち平等を敎ゆるの福音なり平和を謳ふ原動力なり、苦痛を去て悅樂を與へんと努力する菩薩行なり、されば軍國民の觀念と宗教其物の本領とは全く正反對に立つものに似たり、果して正反對に立つものとせば軍國民に在りては宗敎の事の如き等閑に附し去りて可なるべき乎、是れ軍國民と宗敎とに就ての一個の問題にして、人若し深くこの問題に向つて研究を試むるに於ては大なる趣味と奇なる事實とを發見すべし、

軍國民と宗敎とは一往正反對にあるかの如き觀あるも、是れ全く淺膚の見解に過ぎず、凡そ皮相の見にありては全然關聯なきが如く見ゆる事象に於て深く考察を遂ぐるの後、うの内容に於て合一に歸し、若しくは極端の一致を示し、若しくは異性の抱合を見ること決して尠からず、就中軍國民と宗敎との關係の如きは、尤も不可思議なる程内容に於て合一し、兩極端の一致を示し異性の抱合を見るものはあらず、

戰爭の性質及目的に就て稽ふるに、古昔蠻族の間に行はれたるものは慘酷を極め暴戾を逞ふし殺戮され事とし毫も慈仁の意なく節操の見るべきなし、固より大義名分と稱し高風節義と云ふが如き人道の美性は彼等蠻族の解せざる所なり、されば斯る戰鬪に在りては正しく宗敎の本領と相容れざるは云ふ迄もなく、人道上より見るも亦容認すべからざる所なりとす然るに近代社會の文運に伴ふて、戰爭の性質及目的は茲に一大變化を來たし正義の戰爭と名くべきものは決して慘酷を事とするを許さず、うの目的は平和に存しうの行動は正明を尊ぶ國家の利害相容れざるの極止むなく劍戟を提げて起つも、若し敵者にして戰鬪力を失はゝ之を生擒して相當の禮遇を與へ之を慰め、うの負傷するに當りては彼我の別を捨てゝ平等に之を收容し且治療し毫も怨恨仇敵の思を存するなし、是れを文明の戰爭と稱し人道の本分正義の常經となせり、此に於て乎戰爭の目的及性質は決して暴戾なるものにあらずして、その根底には平和と正義とを逸失するなからんことを期せり然れば斯る文明の戰爭にありては皮相の上に全く異れる觀あるにも拘はらず、うの内容に於ては全く宗敎の本領と一致に歸する點あるを發見し難からざるに至れり、

又戰鬪場裡に馳驅して軍人の本分を全ふせんとするには、先づ身命を犧牲とし君國の爲めに死を見る歸するが加く、死して尙悔ざるのみならず、寧ろ滿足を謳ふの覺悟と決心とを要す、則ち生死の岸頭に立て泰然自若たらずんばあらず、生死の巷に出入して、何等怖畏の念ゐるを許さず、この死生の上に於て、覺悟する所なくんば眞の勇士を得べからず、故にこの死生の覺悟を定むるに就ては、全く宗敎の本領たる安心立命と合一し茲に兩極端の一致を示せり、

又戰鬪は剛勇殺伐なるものなるが、而かも宗敎の平和溫靜なるものと異性の抱合を意味し、激烈なる戰鬪に參加して勇奮苦鬪したるの戰士は、うの他面に於て平和溫靜を渴仰するに至る、敵人と雖ども多く之を殺戮したる時は悲慘悽愴の情に堪へざるものあり、此に於て乎、宗敎的追悼菩提の心情禁じ難きに至るは、古今の英雄の心事に就て多く見る所なりとす

斯くの如く軍國民は文明の戰爭の性質及目的に於て宗敎の本領と合一し、又死の問題に於て兩極端の一致を示し、又異性の抱合に於て大に接近せるを發見すべし、加之軍國民は冥福的思想に於て、天佑を仰ぐ上に於て、宗敎に接近せんとすうの他軍國民は人生の問題に就て、眞面目に研究すべき動機を與へられ、思想の衝動を見ること多く、又些々たる劣情を遺蕩するを得べし此等の關係上軍國民は宗敎に近接すること意外に多きは事實の證する所にして、古今東西の史上に於て戰爭の影響として宗敎の勃興を促したるの事例決して乏しからざるを見る、

果して前來述ふるが如く軍國民と宗敎とが諸種の關係に於て近接し且つ爲めに宗敎の興起を催す場合ありとせば、今回の日露戰爭の影響は果して宗敎の上の何物を齎らすべき歟、余を以て見れば日本國民は交戰上に於ては文明の智識及利器は悉く吸收し採用したるを見るも、宗敎に對する思想に於ては意外にも稚劣の域を脫せざるかの感あり、是れ我國文明の充全圓滿を意味せざるものとの批評ある所以にあらざるなき歟、余は切言する所あらんとす日本國民は軍國民として宗敎の發展に當り果して文明國民として耻ぢざる底の覺悟ありや國家の品位は富强と伴ふに思想の文明を以てせざるべかず、而して思想の文明は先づ宗敎と道德の上に於て之を試驗せらるべきなり、故に宗敎及道義に於て迷信と非義とを存續するの間は、到底世界の一等國として誇るを得ざるべし、是れ折角軍人が死を以て買ひ得たる國位名譽を他面に於て逸し去るものにして、遺憾之に過ぎたるはなし、日本國民は戰鬪に於て忠勇義烈の國民たると同時に、宗敎に於て、道義に於て、文明正義の國民たらずんばあらず、斯くて精神上物質上共に世界の一等國として誇稱するに足らん乎、

果して宗敎に道德に精神上の文明を求めんとせば、我軍國民の覺悟を一段この方面に注きて、區々たる迷信習慣儀禮式典、

の非文明非合理なるものを蟬脱し去らずんばあらず、之れ國家の爲め將た死を鴻毛の輕きに比して戰場の露と消ゆる忠勇義烈の軍人に對して軍國民の當に發奮斷行すべき所ならずや若し軍國民の覺悟として斯くの如き決心を得ば、是れ眞に國家の幸慶にして、吾人の所願亦爰に竭きたりと謂つべし、但悲む所は我軍國民が迷信的淺薄なる信仰に甘じて、毫も宗教上道義上に開發進取の英氣なきの一事是なり、謂ふに日清の役に於て外國新聞の批評せし如く、日本人は戰爭に強きも精神上宗教道義に於ては未だ半開國民の域を脱する能はざるを悲むとの語をして、この度の日露交戰後の日本に向つて繰返さしむることなきや如何、

余は軍國民が撰むべき求むべき所の宗教に關し適當なる考案の二三を列ねて、聊か參考に資する所あらんとす、

軍國民が撰擇すべき宗教は第一にその道德觀に於て國家思想に富み適當なる教訓を與ふるものたらずんばあらず、又積極的道德を唱道して生々活動の主義を鼓吹するものたらずんばあらず、若し非國家的の教義信條を存せば斷じて排斥し去るべし、消極退嬰の道德を採るの宗教たらば、決して依信すべきにあらず、

第二に於ては統一的主義を有する宗教を撰み求むべし、軍國民は尤も統一を貴む、若し國民の一致結合を闕かば其害言ふべからざるものあらん、而して我國に於ては歷史的發達として佛教に於ける幾多の佛菩薩を奉じ神道の諸神を仰げり、故にその信仰の意識その教義の信條に於て、これ等多神諸佛の綜合統一を理想するの主義を採用し、各個の信奉せる本尊に於て分裂の弊に陷ること勿らしむるを要す、是れ軍國民の注意として尤も緊要なるを知らずんばあらず、若し甲乙分離して一佛一神を採るが爲めに他佛他神との脈絡貫聯を失するが如き教義信條を勤むるの宗教は斷じて排斥して可なり、國家は平和を旨とするも止むを得ずして戰鬪を宣言することあるが如く、宗教は統一を理想とするもこの目的を遂行する前に横はる妨害物ならば斷々乎として之を取除かざるべからず、

第三死生安心に就て尤も周足圓滿なる教義信條を有する宗教に賴るを要す、凡う如何なる宗教に在りても多少の死生觀を有せざるものはあらず、されどうの教義說明に至りては非常なる等差を存し、うの稱劣あるものと、その高遠なるものとの間には、幾階段の優劣たるやも知るべからず、故に尤も周足圓滿なる死生觀を有し、うの安心は以て世界の人類中尤も優等の地位にあるを得せしめずんばあらず、若し如何なる教義にても死生の間に處して、泰然なるを得ば足れりと言ふが如きは、是れ全く蠻的思想なり、見よ彼の投身し、轢死するものを、彼等は極めて陋劣なる思想を以て決死の思想となせるなり、佛教には是れを邪定と稱して尤も賤めり、若し如何なる思想にもあれ死を決せば足れりと言ふものあらば、うは

眞に人間の價値を知らざるものなり、或る目的の爲めに人を賊するものなり、是れ豈可憐のことならずとせんや、故に軍國民の死生觀は、尤も完全にして且發達せるものを採りて之を定むるを要す、是れ國家の品位國民の價値に關する大問題たるなり、

第四冥福思想に向つて理義正明なる思想を喚起する所の合理的宗教を採擇するを要す、宗教には天佑とか冥福とか加護とか利益とか感應とか靈驗とか稱して一種の神秘的作用を說かざるもの殆んど稀なり、されは一概に冥福思想を排すべきにあらず、彼等が武運の長久を祈り、軍隊の健全を祈り、皇軍勝利を祈り、國威宣揚を祈り、平和克復を祈り、所願圓滿を祈るは敢へて責むべきにあらず、されどこの冥福思想に就て正義の觀念と背馳せる祈願を是認し、若しくは不合理なる祈願を容受し、若しくは單に冥福を仰きて人事人力の如何を顧みざるが如き偏狹にして且稚劣なる迷信狀態を存續せる宗教は斷じて採用すべからず、うの冥福の祈願をして宜しく正義ならしめ、合理ならしめ、將た人事の及ぶ所は人事を盡し人力の能ふ所は人力に類り漫に祈禱に耽りて却て人事人力を減殺せしむるが如き、教義信條は蠻風邪教なりとして排斥し去る所の、眞正なる宗教を採用すべし

第五形式に泥まずして精神的に活ける宗教を採用すべし、屬性を輕しとして本質を發揮する宗教に依信すべし守札を携帶せずとも佛神の守護なきにあらず、活ける神明佛陀は鄕等の如何なる場所如何なる時に在りても頭上身邊に在りて之を擁護せられあるなり、精神上の信仰慰安を賤しとして形式上に重きを置くものは軍國民として採用すべからず、何となれば眞の信仰眞の慰安は精神的ならずんは愈死の場合に於て効用を有せざればなり、宗教に附屬せる儀禮習慣は一概に廢すべきにあらざるも、眞の安心上に於ては常に本質的に鍛練せずんばあらず、而して宗教の本質を研究する時は茲に眞正なる信仰活力ある慰安を得て軍國民をして層一層忠勇義烈の彩華を放たしむべければなり

已上略して五個の要點を擧げて軍國民の撰擇すべき宗教の要素を示せり、而してこの五個の要素を具備せる宗教は何れにありやと云ふに我大日本帝國に產出したる宗教にして所謂日本的宗教とも稱せらるゝ所の聖日蓮の唱道したる教義是なりとす、は偏所見地より之を諸君の前に推薦するにあらず自ら敬服する所あるが爲めなり、已下前記五個條に關する聖日蓮の遺文の數節を紹介して本論を結ばんとす、

第一　國家觀念に富み且つ積極的道德を皷吹せられたる遺文の數節

開目抄　我れ日本の柱とならん、我れ日本の眼目とならん、我れ日本の大船とならん等と、ちちひし願やぶるべからず

立正安國論　所詮天下泰平國土安穩君臣所樂、士民所思

也、夫國依二法而昌一、法因レ人而貴、國亡レ人滅、佛誰可レ崇
法誰カ可レ信哉、先祈二國家一須レ立二佛法一
仝　失レ國滅レ家、何レ所ニカ遁レ世ヲ、汝須下思ハ二一身之安堵一者、

先ヲ轉中四表之靜謐上者歟、

蒙古使御書　一切の大事の中に、國の亡るは第一の大事に候也、

一昨日御書　安レ世安レ國爲レ忠爲レ孝矣、是偏爲レ身不レ述レ之、
爲レ君爲レ佛爲レ神爲ニ一切衆生ノ所仝ニ言上一也、

太田抄　肇公之翻經ノ記云ク、大師須梨耶蘇摩、左手持二法華經一
右手摩二鳩摩羅什頂一授與云佛日西入遺耀將レ及レ東
此經典有レ緣二於東北一汝慎傳弘云云、予拜二見此記文一兩
眼如レ瀧、一身偏悅此經典有レ緣二於東北一云云、西天月
氏國未申ノ方、日本國丑寅ノ方也、於二天竺一有レ緣二於東北一、
豈二非ニ日本國一哉、遊式之筆ニ云ク、始ノ自西傳フ猶ク月之生ニ
今復東ヨリ返ル猶ク日之昇ルカ云云、正像二千年ニハ自レ西流レ東、
暮月之如シ始ノ西空ニ、末法五百年ニハ自レ東入レ西ニ、朝日之
似レ出ル東天一、

第二　統一的宗教に關する遺文の數節

本尊抄　天晴メレハ地明カ、識二法華一者ハ可レ得二世法一歟、

開目抄　此の壽量佛の天月、しばらく影を大小の器に浮給を
諸宗の學者等、近は自宗に迷ひ、遠は法華經の壽量品をし
らず、水中の月に實月の想をなし、或は入て取んとれもひ、
或は繩をつけてつなぎとどめんとす、天台云不レ識二大月
但觀二池月一等云云、

日女抄　爰に日蓮いかなる不思議にてや候らん、龍樹天親等
天台妙樂等だにも顯し給はざる大曼荼羅を、末法に入て二
百餘年の比、はじめて法華弘通のはたしるしとして顯し奉
るなり、是全く日蓮が自作にあらず、多寶塔中大牟尼世尊
分身の諸佛すりかたきたる本尊也、されば首題の五字中央
にかゝり四大天王は寶塔の四方に坐し、釋迦多寶本化の四
菩薩肩を並べ、普賢文殊等舍利弗目連等座を屈し、日天月天
第六天の魔王龍王阿修羅、其外、不動愛染は南北の二方に神
を取り、惡逆の達多愚癡の龍女一座をはり、三千世界の人の
壽命を奪ふ惡鬼たる鬼子母神十羅刹女等、加之日本國の
守護神たる、天照太神、八幡大菩薩、天神七代地神五代の神
々、總じて大小神祇等體の神つらなる、其餘の用の神豈も
るべきや、寶塔品云接諸大衆皆在虛空云云、此等の
佛菩薩大聖等總序品列座の二界八番の雜衆等、一人もも
れず此御本尊の中に住し給妙法五字の光明にてらされて、
本有の尊形となる、是を本尊とは申也、

如說修行抄　敵は多勢也、法王の一人は無勢也、至ヶ今軍や
む事なし、法華折伏、破權門理の金言なれば、終に權教權門
の輩を無二一人一責落して法王の家人となし天下萬民諸乘一

佛乘と成て、妙法獨り繁昌せん時萬民一同に南無妙法蓮華
經と唱奉らば、吹風枝をならさず、雨壤を不レ碎、代は堯農
の世となりて、今生には不祥の災難を拂ひ、長生の術を得
、人法共に不老不死之理、顯れん時を御覽せよ、現世安穩
の證文不レ可レ有レ疑者也、

日眼女釋迦抄　法華經壽量品ニ云、或ハ說二己身一、或ハ說二佗身一
等云云、東方の善德佛、中央の大日如來、十方の諸佛、過
去の七佛三世の諸佛、上行菩薩等、文殊師利舍利弗等、大
梵天王、第六天の魔王、釋提桓因王、日天月天明星天、
北斗七星二十八宿、五星七星八萬四千の無量の諸星、阿修
羅王、天神、地神王、山神海神宅神里神、一切世間の國主
とある人、何れか教主釋尊ならざるや、天照太神、八幡大
菩薩も、其本地者教主釋尊也、例せば釋尊は天の一月、諸
佛菩薩等は萬水に浮る影也、

第三　死生の安心上、周足圓滿なる意義を有せる遺文の數節

佐渡御書　世間の法にも、重恩をば命を捨て報ずなるべし、
又主君の爲に命を捨る人、すくなきやうなれども其數多し
男子ははゞに命をすて、女人は男の爲に命をすつ、魚は命
を惜む故に、池にすむに池の淺き事を歎て池の底に穴をほ
りてすむ、然ども石にばかされて釣をのむ、鳥は木にす
む、木のひさき事をおぢて、木の上枝にすむ、しかれども
石にばかされて網にかゝる、人も又如レ是世間の淺事には身
命を失へども、大事の佛法なんどには捨る事難し、故に佛
になる人もなかるべし

報恩鈔　夫老狐は塚をあとにせず、白龜は毛寶が恩を報ず、
畜生すらかくのごとし、況人倫をや、されば古の賢者豫讓
といひし者は、劍をのみて智伯が恩にあて、弘演と申せし
臣下は、腹をさひて衛の懿公が肝を入たり、何況佛教を
習はん者、父母師匠國の恩をわするべしや、

種々御振舞御書　此婆婆世界にして、雉となりし時は鷹につ
かまれ、鼠となりし時は猫に噉はれ、或は妻子の敵に身を
捨所領に命を失し事、大地微塵よりも多し、法華經の御爲
には一度も失ふ事なし、されば日蓮貧道の身と生て、父母
の孝養心にたらず、國恩を報ずべき力なし、今度類を法華
經に奉て其功德を父母に回向し、其餘をば弟子檀那等に、
はぶくべしと申せし事是也、

崇峻天皇御書　人身は難レ受　爪上の土、人身は難レ持　艸の上の
露、百二十まで持て名をくだして死せんよりは、生きて一
日なりとも擧レ名事こそ大切なれ、中務三郎左衛門尉は、
主の御爲にも、佛法の御爲にも、世間の心根も、吉かりけ
り吉かりけりと、鎌倉の人々の口にうたはれ給へ、穴賢穴
賢、藏の財より身の寶勝たり、身の寶より勝れたる心の財
第一也、此御文を御覽あらんよりは、心の寶を積せ給べし、

第四　冥福思想に就て理義正明なる遺文數節、

立正安國論　旅客來て嘆て曰く、近年より近日に至るまで、天變地夭飢饉疫癘、逼く天下に滿ち、廣く地上に迸こる、牛馬巷に斃れ、駭骨路に充てり、死を招ぐの輩既に大半に超へたり、之を悲まざるの族ら敢て一人もなし、然る間、或は利劍即是の文を專らにして、西土教主の名を唱へ、或は衆病悉除の願を恃みて、東方如來の經を誦し、或は病即消滅不老不死の詞を仰て、法華眞實の妙文を崇め、或は七難即滅七福即生の句を信じて、百座百講の儀を調へ、有るは秘密眞言の教に因て、五瓶の水を灑ぎ、有るは坐禪入定の儀を全ふして、空觀の月を澄し、若しくは七鬼神の號を書いて、千門に押し、若しくは五大力の形を畫して萬戸に懸け、若しくは天神地神を拜して、四角四界の祭祀を企て若しくは萬民百姓を哀て、國主國宰の德政を行ふ、然りと雖とも、肝膽を摧いて彌々飢疫に逼まる、乞客目に溢れ死人眼に滿つ、屍を臥せて觀ものとし、尸を并べて橋となす、歎夫ば二離璧を合せ、五緯珠を連ぬ、三寶世に在すし百王未だ窮まらず、此の世早く衰へ、其の法何ぞ廢れたる、是れ何の禍に依り、是れ何の誤に由るや、謗を好て正を忘る、善神怒をなさゞらんや、圓を捨て偏を好む、惡鬼便を得ざらんや、彼の萬祈を修せんよりは、此の一凶を禁めんには如かず、

唱法華題目抄　疑て云く、唐土の人師の中に、慈恩大師は十一面觀音の化身、牙より光を放つ、善導和尚は彌陀の化身口より佛を出す、此の外の人師、通を現し德を施し、三昧を發得する人世に多し、何ぞ權實二經を辨へて、法華經を詮とせざるや、答て云く、阿竭陀仙人外道は、十二年の間、耳の中に恆河の水を納め、婆藪仙人は自在天と成て、三目を現す、唐土の道士の中にも、張階は霧を出し、欒巴は雲を吐く、第六天の魔王は、佛滅後に比丘、比丘尼優婆塞、優婆夷、阿羅漢、辟支佛の形を現じて、四十餘年の經を說くと見へたり、通力を以て智者愚者を知るべからざる歟、唯佛の遺言の如く、一向に權教を弘めて、實經に入らざらん者は、或は魔に誑かされて通を現ずる歟、但法門を以て邪正を糺すべし、利根と通力とには依るべからず、

可延定業抄　定業限りあり、しかれども佛法華經をかさねて演說して、涅槃經となづけて、大王にあたへ給ひしかば、身の病忽に平愈し、心の重罪も一時に露と消へにき、佛滅後一千五百餘年、陳臣と申人ありき、命知命にありと申て、五十年に定て候しが、天台大師に値て十五年の命を宣べて、六十五までをはしき其上不輕菩薩更增壽命と說かれて、法華經を行して定業をのべ給ひき、乃至、日蓮悲母をいのりて候しかば、現身に病をいやすのみならず、四箇年の壽命をのべたり、

聖愚神守護抄　誠主剛なれば、守る者も强し、誠主怯なれば

守る者忙す、心は是れ身の主なり、乃至、心固ければ則ち强し、身の神尙强爾なり況や道場神をや、

第五　精神的、本質的、宗教の意義を發揮せる遺文の數節、

南條抄　此處は人倫を離れたる山中也、東西南北を去て里もなし、かゝるいと心細き幽谷なれども、教主釋尊の一大事の秘法を、靈鷲山にして相傳し、日蓮が肉團の胸中に秘して隱し持てり、されば日蓮が胸の間は諸佛入定の處也、舌の上は轉法輪の所、喉は誕生の處、口中は正覺の砌なるべし、かゝる不思議なる法華經の行者の住處なれば、爭でか靈山淨土に劣るべき、法妙なるが故に人貴し、人貴きが故に所尊しと申は是也、神力品に云く、若於林中、若於樹下、若於僧坊、乃至而般涅槃、此砌に望まん輩は、無始の罪障忽ち消滅し、三業の惡轉して三德を成せん、

開目抄　一切經の中に、此壽量品ましまさずば、天に日月なく、國に大王なく、山河に珠なく、人に神のなからんがごとし、

仝　夫れ釋尊は娑婆に入り、羅什は秦に入り、傳教は支那に入り、提婆師子は身をすつ、藥王は臂をやく、上宮は手の皮をはぐ、釋迦菩薩は肉をうる、樂法は骨をもて筆とす、天台云、適ブ時而已等と云云、佛法は時にあるべし、日蓮が流罪は、今生の小苦なればなげかはしからず、後生には大樂をうべければ、大に悅ばし、大に悅ばし、

戰爭獨語（其一）

個人に「我」がある、そして個人の「我」と個人の「我」とが互ひに衝突する、こゝで喧嘩といふものが起るのである、そしてその所謂喧嘩が小なる意味の戰爭である、國家は人格である、既に人格である、上は意思がある、既に意思がある上は「我」といふものがある、この國家の「我」と國家の「我」とが、ある時と、ある處と、ある度で衝突が起る　そして其衝突が單に交外時期の衝突でなく戰爭時期の喧突となる、所謂茲で戰爭が開始されたのである、個人の「我」が原始的自然的である中は爭奪と喧嘩が烈しいのである、將が絕へないのである、これが漸次社會的道德的宗教的になつて來るに隨ふて平和と安全とが保たれるのである、國家の「我」もかの原始的自然的の狀態を早く脫して道德的宗教的の「我」とならなければならぬ、世界の平和、人道の光榮は、この國家の「我」が道德的となり宗教的となられればとてもだめだ。（上）

予か愛國心を表白して軍人諸君に信仰を勸む

今成乾隨

予は　陛下の臣民として忠君の念の涌起すると諸君と同じく予は國家の一員として愛國の情の熾盛なると諸君と異なるとなし、故に國家の一大事變に際しては義勇奉公は、固より當然の本分にして、御詔勅の如く、我が國の精華にして、亦我か祖先の遺風を顯彰するに外ならず、然れども此は之れ、主と從との關係に於て、我は從なり、故に献身せざるべからず、又團体と個人との關係に於て、我は個人なり、故に犧牲とならざるべからずとの意義より來れる覺悟にして、全く自己を中心として安心したるにあらず、語を換へて之を云へば、自己を劣者とし、又第二位として、覺悟せるものにして、決して自己を勝者とし、又第一位として安心したるものにあらず故を以て國家夫れ自身の目的を達する上に於て、事足るか如しと雖ども、退て熟考するに、個人として一種物足らぬ感想を生起するとなしとせず、果して斯の如き塲合ありるすれば國威發展の上に多少の遺憾なきを得ず、此の欠點……嗚呼此の一大欠點を補はんとすれば、宗教によるの外に道なし、直言すれば顯本法華宗の正しき信仰にあらずんば、斷して眞實なる安心を得ると能はざるなり、是れ予が該教徒なるの故を以て爾云ふにあらず、眞正に國家を思ひ、諸君を思ふの至誠より出づるの言なり、諸君願くば、諸君の胸中に藏する一切の思慮分別を捨てゝ、予が陳ぶる處を傾聽あれ、

佛陀の此の世に降誕せらるゝや、直に天上天下唯我獨尊と道破し給へるとは、諸君の嘗て聞きし處なるべし、是れ則ち自己を勝者とし、第一位に置き給へし金言にして、何物の前にも屈從し給ざさるを表白し給へるなり、自己は主なり、圏象は從なり、自己は中心なり、團体は外圏なり、斯の如き意義に於て大悟徹底し給へり、然らば佛陀は吾人に對して絶對に佛陀に眼從すべきとを命せられたるか曰、大に然らず、經に如し我等無異と說き、吾人も亦唯我獨尊と道破すべく敎へ給ひしなり、然れども吾人現在の境界に滿足して唯我獨尊と云ふを許さず、靈界の光明を發輝して始て如我等無異の唯我獨尊と稱道するを得べし、若し夫れ自己本來の眞信格を認識せずして唯徒らに劣者として甘んと第二位以下として犧牲とならば、天晴なる覺悟と云ひ得べきも、眞正なる安心と謂ふを得ず、いでや之より吾人の生命の如何に獨尊なるかを開示せん

無始無終の時間を貫き無際無限の空間に亙り、自己の生命程尊きものはなし、若し吾人にして生命なからんか、宇宙萬有吾に於て何かあらん、人倫道德吾に於て關する處なし、神佛

何の用をかなす、吾人の生命ありてこう衣食住の必要も生し、日月星晨にも待つ處あり、父母は我が生命を生み給へるを以て孝養の念も生じ、國王は我が生命を保護し給ひてこそ忠君の念も生じ、師長は我が生命の開發に資せられてこう尊敬の念も生じ、佛陀は我が生命に無限なる價値を認識せしめられてこう報謝の念も生するなれ、之を要するに、我が生命に對し直接若くは間接に利益を與ふるものに對して、始て感謝報恩の念反應するに過ぎざるのみ、是れ實に自明の理にあらずや、彼の徒らに自己を沒却して他の犧牲となり、以て自ら高潔なりと自贊するが如きは、自己の愚蒙を表白するのみならず、他の犧牲となる意義をも知らざるなり、自己豈斯の如き卑きものならんや、古人曰、一切寶中命寶是第一と、又曰、三千世界の凡ての寶を集むるも、自己の生命に比するを得んやと、是れ蓋し吾人の意を得たるものと云ふべし

抑も吾人の生命に長短あり、貴賤あり、智愚あり、貧福あり、苦樂あり、昇沈あり、千差萬別殆と區別するに遑あらず、然れども是れ唯表面皮相の觀察に過ぎず、深く其の本体に立入り、悟者の活眼に認識せらるゝ處は平等なり、絶對なり、無限なり、唯我獨尊なり、勝者なり、第一位なり、迷者の見たる生命は長短共に短なり、貴賤共に賤なり、智愚共に愚なり、貧福共に貧なり、苦樂共に苦なり、昇沈共に沈なり、千態萬狀皆共に劣なり第二位なり、試みに之を辨明せん、吾人の生命は七十古來稀なり、誰れか二百年の壽命を全ふせん、之を無始無終の時間に比すれば、眞に一秒時に過ぎず、短の短なるものならずや、人生の尊貴き王侯に過ぎず、僅に芥子粒大の地球の一隅に割居するに過ぎず、十方法界を有するものに比すれば、賤の賤なるに非ずや、天下の大博士を以て任ずるものも、僅少なる時間と局部の實相を、淺薄なる意義に於て解釋を下すに過ぎず、之を三世盡十方の緣起實相を徹底する眞理の權化に比すれば、愚の愚なるものにあらずや、貧福苦樂昇沈等より觀察するも、亦皆然らざるはなし、然るに自己の本体を開顯し、其の本地の實相を達觀せる佛陀顯本の敎を聽くに、佛陀の生命は三世常住なり、無始無終なり、生滅無常あるとなし、佛陀の生死を現ずるは、非生現生非滅現滅なり、常住なる活動の上に表現する妙事なり、譬へば太陽は天空に懸りて不動なるも、地球の自轉によりて太陽の出沒を見るか如く、常住なる佛陀は智悲の光を放つも、自己の流轉によりて佛陀の生死の如く見ゆるのみ、佛陀は宇宙法界を以て我が領有化域とし、普現力用至らざるなく、其の尊貴何ものか之に比せん、眞理の本源は佛陀の智見に攝收せられ、大慈大悲の發動は眞理の光明ならざるはなし、其の全智全能何ものか之に例せん、佛陀の生命は常住なり、快樂なり、自在なり、淸淨なり、眞なり、善なり、美なり、此の間の消息凡慮常識の企て及ぶ處ならんや、顯本壽量の上に表現せら

れたる佛陀は實に斯くの如くにして唯我獨尊なり、斯の如き神聖なる佛陀の生命は、直に之れ吾人の生命の本体なり、於是乎吾人生命の價値始て無限なるを信得するを得たり、吾人と佛陀の差は、其の生命の本体に於て違ふことなきも、其の現象作用の上に於て、己顯未顯の差あるのみ、茲を以て唯我獨尊の眞實義は本佛に於てのみ表現せられ、吾人は其の素地あるも、事實に於て然るを得ず、故に其の事實を顯現するの道に從はずんはあるべからず、然らば其道如何、曰く他なし、妙法蓮華經を信受するの一行あるのみ

抑も妙法蓮華經は、諸佛出世の本懷にして衆生成佛の直道なり、諸佛の一切の功德は勿論、本佛釋尊の我本行菩薩の功德も、我實成佛已來甚大久遠の功德の妙法に包容せられざるはなし、本佛の体相用其の儘妙法なり、妙法の外に佛なく、佛の外に妙法なし、自己の本体亦是れ妙法なり、本佛の生命は妙法の信仰によりて認識せられ、吾人の生命は妙法の信仰によりて本佛の生命と一如することを得、大聖日蓮曰く、釋尊の因行果德の二法は妙法蓮華經の五字に具足す、我等此の五字を受持すれば、自然に彼の因果の功德を讓與し給ふと、此の信念一度發すれば、凡夫生死の卑賤なる境界なりと思ひしは、全く是れ我が身の僻思にして、常住不滅の生命を有し給へる本佛の愛子にして、同く唯我獨尊の紹繼者なり、譬へは民の子と思ひしは我が身の誤謬にして、國王の長子なるを自覺せるが如し、於是乎我が身の如何に尊敬すべき者なるかを知るを得ん

說て茲に到れば、諸君は自己の尊むべきを知るも、忠君愛國の情を沒却し、人倫道德を顧みざるの害なきかと疑ふならん大に然らず、自己の價値を認識せざる忠君愛國は、未だ以て圓滿なる域に達せず、人倫道德亦然り、予は嘗て眞理の光明に接觸して左の言を發したるとあり

感謝的報恩の行爲は自己の價値と正比例をなす

と、若し夫れ自己の生命にして衢きに述べたる如く、長短共に短にして貴賤共に賤智愚共に愚にして貧富共に貧苦樂共に苦にして昇沈共に沈ならば其の自己の生命の價値極めて安値なるにあらずや、果して然らば我を生み給へる父母、我を統治し給へる君主、我を補助する同胞、我が住する國土に對する感謝報因の念隨て平凡ならずや、然るに之に反して、我か生命の無限なる價値を認識し、亦之に達する方法即信仰の境に安住せば我を生み我を哺育し給へる父母の恩の始何に重大なるよ、我を統治し給ふ國王の如何に尊敬すべきよ、我を補護し給へる國家の如何に大切なるよとの念は、益々溌溂として生じ、如何にしてこの大恩を感謝せんとの念禁せんとして禁ずる能はざるものあるを覺ゆ、予が忠君愛國の念は、忠良なる臣民として亦國家の一員として、勃然生起するは諸君と異ならざるも、其の無限なる靈界の光明に照されて、偉大

なる報恩の念は實に此の信仰より出づるものあり、而して此の兩面の忠君愛國の念は、決して衝突せざるのみならず、自己の生命の現象及本体より突發せるものにして、諸君の嘗て有せる有限なる形体に、無限なる生命を注入するものと云ふへし、然り而して吾人は其の施恩者に對して、如何なる方法により感謝すべき、曰く他なし、自己の本分任務を盡し、其の本務の爲には財產勞力は云ふ迄もなく、身命を犧牲に供するを以て其の極度となす、生命を捨つるは目的にあらず、其の任務の爲に生死を顧みざるを云ふ、佛陀は敎て曰、自己の任務の爲に犧牲とする中に於て、生命を供養するより大なるはなし、一切の尊重すべきもの、中に於て、生命に過ぎたるものなければなり、又曰三千世界の一切の草木國土、皆是れ我本行菩薩道時の献身的骨肉ならざるはなしと、決死的行動の如何に讃美稱揚せられたるかを知るに足らん、予は一面に生命の尊むべきを說き、他面に生命を捨つることを奬むるを以て自家の矛盾せるにあらずやと疑ふものあらん、然れども予が捨てよと云へる生命は、劣者及第二位にある生命にして、予の貴む生命は勝者及第一位にある生命なり、其の第一位の生命に到達するを、生死の夢の醒むると云ふなり、凡夫卑賤の生命顯本して、佛陀尊高の生命に一如するを以てなり、更に眞生命の眞價を發揮し、唯我獨尊の境に達せは、諸君の勇戰奮鬪生死流轉は、却て是れ常住の上の變化の妙用たるを自覺するの時あらん

嗚呼、諸將士は陛下の御詔勅に奉答せんが爲に、殘忍暴戾なる敵國と戰ひ、更に氣候風土其他あらゆる艱難と戰ひ、其の困難吾人内地にあるものを夢想する能はざるもの多大ならん、予從軍布敎師たらんとを欲して事情の許さゞるものあり諸君を思ふの情極て深し、今諸君の生死岸頭に立てるを見て、彼岸に到達すべき大船を與ふ、他なし

南無妙法蓮華經と唱へよ

と云ふ唯この一梵音聲のみ

戰爭獨語（其五）

主戰論を非として戰論を是とするもの、あゝ世は何ゆへにかゝる罔問題に耳を傾けなければならないのであらふ、主戰論派はかくて永久に地上の平和に身を温めることが出來ないのである、非戰論派はかくて自已も今まさに爭奪、競爭、煩悶、火宅の中に狂奔しつゝあるをしらないのである、主戰論は差別主義に傾き、非戰論は平等主義に傾き、主戰論は有我主義に傾き、非戰論は無我主義に傾く、主戰論は人口經濟の利を說き、非戰論は經濟平和の利を說く、されど思へ世豈に永遠の平和あらむや彼等は時として荒れ狂ふのである、是終に非戰論の否定せらるゝ所以である、亦さらに思ふ世豈に永遠の鬪爭あらむや彼等は時として休息するのである、これ主戰論のいつも勝利を得ざる理由である、人生の事相は善があれば惡がある、平和があれば戰爭がある、是萬古の眞理である、今にして尙主戰非戰ないふものは、とても人生の事相が判らないものである。

（よ）

軍人に與ふる信仰及安心

古定賢正

日露戰爭開始せられてより國民の多くは各々其職分に應じて國家に義勇奉公の働作を致しつゝあり、政治家は政治的立場より帝國の將來とるべき方針を論じ、實業家は滿韓企業會樣なるものを起して以て戰爭に伴ふ帝國の利權を伸張せんとす、かの民間の多くが相携さへて國債の募集の應じ亦は恤兵奬兵の事に金力を以て奉公の働作を爲すもの誠に舉國一致の響なり、

予は宗教家なり宗教の信仰を以て世に立つもの也、予にして若此千載未曾有の戰爭に際して國家の一員として奉公の働作を敢てなすべくば予の純正の立場たる信仰を以て將亦此信仰に伴ふ安心とを以て此を聊か吾光榮ある軍人諸氏の前に披瀝して以て奉公の働作を全ふするを尤も適當なる處置なりと覺ゆ、

旅順の夜雨、遼陽の晴嵐、嗚呼誰れか故郷遠征を思ふの情に堪へざらんや、思へば軍人は護國の神とはいひながら亦國民の義務とはいひながら、ことし二月の始めより否世は對露同志會の運動盛んなりし頃より卿等軍籍にあるものは多く召集せられて或るものは海の上に或るものは陸上に夜をこめて軍事的働作をとり今や遠く進んで滿州の野にあり、予等は今にして其勞苦を思ふ誠に感謝の念に堪へざる也、

軍人の生命は個人の生命にあらずして實に國家の生命也、一家庭の生命にあらずして、實に護國の生命也、こゝを以てか軍人の生命は其個人たりし時に於て貴重なりしよりも將亦家庭の組織せられたる上に於て貴重なりしよりも、優に層一層倍一倍貴重なるにいたりし也、嗚呼かゝる國家の生命護國の生命を抛ちて敵國と戰かふを思へば予は太だ戰爭の高價なるを覺ゆ、然れども此高價なる戰爭を敢て開始せざる可らざるに到りし國民の責任は大いなる哉、予は一面にかゝる大戰爭を敢て開始するに到りし國民の責任を思ふと同時に國家の生命としての軍人の生命の太だ貴重なるを深く認識せんことを欲す、何となれば軍人の生命の高價にして貴重なるを知るは國民が將來の責任を解する所以の道なれば也、

將來の責任予は之れをいはざるべし今はいふの時にあらざれば也、たゞ軍人の生命の貴重なることを知るものは自から默會する處あらん、夫然り既にかくの如く貴重なる生命なりと雖今や日露の大戰已に開けて精鋭にして猛烈なる軍隊北滿州の野に進みたるの時、いかに貴重なればとて如何に國家の生命なればとて將亦如何に護國の生命なればとて此を貴重するの極として之を愛護しさては之を惜しみて砲火閃閃の中に於て少しにても退歩的行働をとらんかこれ實に由々しき出來ごと也、否單に軍事的働作に於て由々しき出來ごとたるにといまらずして其軍人の生命は護國の生命たり國家の生命たる能はずして急轉直下個人的生命に墮落し家庭的生命に墮落し了らむ也、然れどもこれらば吾光榮ある帝國軍人の意思にあらざることは予の信じて疑かはざる處也、

かゝる貴重なる生命を抛ちて茲に進で退くことを知らざる勇ましき義烈無雙なる軍人に對して、予は予の信仰を披瀝して以て生死出沒の危險を敢てする諸氏の心靈に向つて慰籍を與ゑんとす、

若脱白靈現に予の信仰を表白すれば予は世界幾多の宗教の中に於いて特に日本に傳はる佛教を信ずるもの也、否其佛教の中に於いても予は特に寂靜無我の消極的眞理を立場とする小乘佛教を信ずるものにあらずして生死即涅槃娑婆即靈山の積極的眞理を立場とする大乘佛教を信ずるもの也、否大乘佛教のうちにもかゝる積極的眞理を表顯したるは世界宗教境上の人物に於て優に尊敬の念と捧くべき日蓮上人の宗教に入りて始めて之を信するもの也、予はこゝに於てか更に脱白露現に亦同時に滿腹の熱情を以て南無妙法蓮華經の信仰を以て諸氏を捧げんとすゝ南無妙法蓮華經の五字七字、是を以て敢て太皷法華の滑稽なる働作を聯想することなかれ是を以て萬燈法華の御祭に似たる働作を聯想するとなかれ、是を以て現世主義御利益主義肉欲主義の働作を聯想することなかれ是を以て迷信狀態の多き日蓮門徒を聯想することなかれ、予は予の信仰たる南無妙法蓮華經を口にして諸氏をしてかくの如く聯想する勿れといふまでに餘りに今の門徒の狀態が迷信に沈みつゝあるを慨すると同時に南無妙法蓮華經の信仰は斷じて人間の最尊無上なる宗教意識を呼び起すものなることをいはんとす、哲學の眞理をもとむるものは南無妙法蓮華經に來れ、道德の至善をもとむるものは南無妙法蓮華經に來れ宗教の信仰を求むるものは南無妙法蓮華經に來れ、人生觀の歸趣に迷ふものは南無妙法蓮華經に來れ、世の中に於て求めて與へられたる物の餘りに一時的なるにあきたらぬものは來つて更に大いなる佛陀の賜ものを受けよ南無妙法蓮華經は實に人の賜物の一時に消へて存在の價値を疑ふそれにあらずして永遠に活ける大いなる人間の最高のもの也、若夫生死の問題に小さき腦を惱まして人間が宇宙間に於ける位置を解することあたはざるものは來つて南無妙法蓮華經の無始無終の生死に一致せよ、予は斯の如き意義に於て南無妙法蓮華經の信仰を諸氏に與へんとす、思ふに内地の多くの人は或は婦人界を代表して愚袋を送り或は恤兵會を起して物品を寄與したるものはあるも、うは唯諸氏の肉欲の滿足を得たるのみにといまりて一も心靈の慰を得ざりしならん、斯の如きは生死の間に出沒して一意君國を思ふ軍人諸氏の堪へ得べき事ならひや、

南無妙法蓮華經の信仰は常に死すれども常に活きつゝある也、死を以て消極的働作と見るは常識的人間的見解にして若

夫之を超常識の上より達觀し來れば死は實に消極的にあらずして積極的也、暗黑のものにあらずして光明のもの也、失望にあらずして希望のもの也、黑色のものにあらずして白色のもの也、南無妙法蓮華經の信仰は人間の見て以て死となす所以の働作を直ちに靈界の活動となす也、南無妙法蓮華經の信仰に於ては生死の若は退若は失あることなし、既に生死なし此死なき也既に死なければ隨つて亦生なし生死を超絶して優に人間の外に遊ぶ、是あに死すれども常に活きつゝあるものにあらずや、妄我の死を脱して眞我の死に一致せよ何となれば眞我の死は同時に是眞我の生なれば也、南無妙法蓮華經の信仰は眞我に一致するもの也、常に妄我の上に於いて死しつゝ常に眞我の上に於て活きつゝあるもの是南無妙法蓮華經の信仰の上に於て感受すべき心靈の事實にあらずや、

南無妙法蓮華經の信仰は更に大いなる勇氣也、曾て獨逸の宰相ビスマルクいへることあり我軍の規律正しく他軍に强き所以は我軍の士卒には大將の上に猶神ありてしろしめすといふことを深く信ずる者の多に由る也敢て我力にあらずと、卒然として此を讀めばビスマルクが一場の謙遜なる辭令として見るべきも此を味はへば其處に無限なる宗教の味を感んずる也、げにや神ありてしろしめすといふ言葉は如何に人間の頭惱に强大なる響きを傳へたるか、而して此響とともに自已は最早一人の自己にあらず神と共なる自己なることを思ふて更に大いなる强さを感じたらずや、あゝ當年の獨逸の軍隊はかくて非常に强き勇氣ある軍隊となりたる也、今や滿州の野にある吾軍人も若夫一たび劒とる手を暫しゆるめて半夜滿州の野にすだく虫の音をきゝて仰で明月を見るの時は獨り思ひを故山に走るにとどまらずして人生宇宙に對する甚深なる感想を起さずしてやむべき、而して此と同時に自己の存在を疑い更に新たなる煩悶は起らずや、然しながら軍人に哲學は必要なかるべし、與ふべきは宗教ならざる可らず、安心ならざる可らず、信仰ならざる可らず、佛陀の救濟を憧憬せざる可らず、若軍人諸氏にして一たび人間の妄我たる事を意識するに到らば殆ど人間の淋さに堪へざるべし、まして妻に離れ子に離れ親に離れ更に國に離れたる軍人があに淋しさの情を起さずしてやむべき、されど、されど南無妙法蓮華經の信仰は佛陀茲に在せり佛陀茲にいまして信仰の人ととも也、果然吾は獨り存在するにあらざる也佛陀と共に存在する也、劒もつ手の頭には佛陀宿り給ふて我とともに在す也、眞の勇氣は眞の安心に伴ふ、眞の安心は佛陀とともなりとの感想より來り而して此眞の安心に伴なふて眞の勇氣出づ、南無妙法蓮華經の信仰は眞の勇氣ある信仰也、

軍人は慈愛を感せざる可らず南無妙法蓮華經の信仰は眞に慈愛の信仰也、若夫戰場に馳驅して砲火の間に敵と相見ゆるの時も一面必らず慈愛の心なかるべからず、曾て一世ナポレオンがモスコーより退却せんとする時、雪氷と寒氣との爲にいふ可らざる艱難をなめたりき、軍中に一人の獨逸公子あり

從卒と共に路傍の小屋に入りて休みたりしが公子は疲勞に依りて寒氣のうちなりしにもかゝはらず安らかに夢を結びてやがて曉方になりて覺しが、屋外は寒風殊に烈しく雪は前日と異ならず降り續きしが身は殊の外温暖なり、公子從卒を呼べども答ふるものあらず、彼れ眼を定めて其身邊を見れば身は數多の外套を被ひかけられありし、彼は始めて其寒威凜烈の中に身の温暖を覺へし所以を知りしが同時に眼を轉じて從卒の臥したる處を見れば彼は皆外套を脱して其身は冷やかになり居りき、即ち從卒はいつの間にか凍死したるなり、彼は已れの主人を守護せんが爲に其身を犧牲にするの止むを得ざるに到れり、予は之を以て單に義務の働作とのみ見るの甚だ淡白なるに堪ず、予は之を以て義務已上の働作となし一種の慈愛の働作となすの念禁ずる能はず、是は人間の慈愛也、佛陀の慈愛にあらず、否かくの如き人間の慈愛の働作を通して佛陀の慈愛を意識せざる可らず、

予は曾て彼旅順閉塞隊の一人たる廣瀨武夫氏の戰死せる行働に就いて宗教的觀察を下したることありしが、今その再び茲に繰返せば最初廣瀨武夫氏が福井丸に乘じて閉塞の任務に就き將に其任務を全ふして歸らんとせるや、杉野兵曹の見當らざるを探す爲に杉野の名を呼ぶこと三度なりしがかくて隊とりし中に終に敵彈に當りて命を損なふに到りし也、予は此の働作を以て直ちに義務の働作とのみ見るの餘りに無味淡泊なるに堪へず、人は廣瀨武夫氏を以て軍神と稱へ居れどもこは果してかくの如き讃歎は廣瀨武夫氏を適當に讃歎したる言語なるや否やを知るに苦しむ、何事にも淡白なる國民性は熱情ある行働を以ても直ちに淡白なる批評に滿足す、予は之を以て人間先天の心の奥に潜める大いなる聲たることを信せんと欲す、嗚呼此大いなる聲はやがてこれ人間慈愛の聲たるなからむや、而して予は此人間慈愛の聲を通して直ちに佛陀慈愛の聲を聞んことを欲す、かくの如き危險なる場合に際して將亦かくの如き生死はかるべからざる時に臨んでよくかくの如き働作を敢てなしたるもの是豈尋常の平凡の働作ならんや人を危險より導き出すといふことは是直ちに人を救ふ念より生じたるものならずや、人を救ふは是やがて佛陀の御心ならざらんや佛心とは大慈悲心是也、予は廣瀨武夫氏の行動を以て大慈悲心の面影を忍ぶを禁ずる能はず、

西に獨逸公子の從僕の話しあり、東に廣瀨武夫氏の話しあり、あゝ戰爭の權化たる軍人は一面慈愛の權化たる軍人たることを失はず、嗚呼これ眞の軍人なり、而して是が南無妙法蓮華經の信仰の慈愛に入らば如何に畫龍點睛の妙存せずや、南無妙法蓮華經の信仰は慈愛の信仰也、戰爭に從事して其心殺伐となり、夜叉となり、惡鬼となるものは是野蠻の戰爭也人道と平和と光榮とを目的とする戰爭は內に燃ゆるが如き慈愛の心なかるべからず、佛陀茲にいまして吾を慈愛に導びき給ふ、劒もつ手は野心に動くにあらずして、慈愛の心に動く也、南無妙法蓮華經の信仰は慈愛の信仰也、

予は述べて茲に到り更に一の重要にして、誤謬なる思想を打破し予が信仰の慈愛は必ずしも少なる消極的禁殺生的の慈愛にあらざることを論せんとす、

かの露國文壇に於て否世界の文壇に於て少くとも第一流の文豪と評せらるゝトルストイ伯は、六月二十七日の倫敦タイムスに於て日露戰爭に對する意見を公やけにして、其中に、「殺生を禁斷せる佛敎の徒を戰爭に從事せしひるは滑稽なり」といひ、亦「實にも彼の憐れむべき無智蒙昧なる日本農夫が其田園より放たれ、佛敎の眞諦は必らずしも衆生に對する慈悲に存するにあらずして諸の偶像に對して犧牲を供するとに存すと敎へられたり」といひき予は之を以てトルストイ伯の佛敎觀が小乘的に將亦原始的に偏し居ることを知ると同時に佛敎の多くは否日本佛敎の多くは積極的眞理を表顯したるものなるがゆへに其慈悲の情能も亦積極的なることを失はずといはんとす、げにや、やさしきのみが慈愛にあらず、若やさしきのみの慈愛に慣れたるものは無制裁の狀態に入ることあり、强き威力ある制裁ある慈愛は予の信仰に入れる慈愛也、慈愛の情想が個人的家庭的なることあると同時に社會的國家的なることあるを認識せざる可らず、いふまでもなくやさしき慈愛母の如き慈愛は南無妙法蓮華經の信仰に入れる慈愛也、慈愛の情想が個人的南無妙法蓮華經の信仰に入れる慈愛たることは事實なながら亦此小なる慈愛を開いて更に大なる慈愛たらしめざる可らず嚴烈なる慈愛父の如き慈愛たらざる可らず、トルストイ伯の慈愛は消極的の慈愛なり南無妙法蓮華經の慈愛は積極的慈愛なり、此如き積極的慈愛の信仰に入れる軍人は予をして宗敎的に圓滿の解釋せしむれば慈愛の權化としての軍人也、大救世主としての軍人也、佛陀の意思を實行するの人としての軍人也、佛陀の金剛慧力の信仰を得たる人としての軍人也、予は日本の軍人が平和をもとむる爲に戰ふものたることを知りて世界の大救世主たることは知るも、偶像の犧牲たるべく戰かひつゝあることを知らずトルストイ伯の意見は無秩序也、

南無妙法蓮華經の信仰は更に平和の信仰也、然り平和をもとむる爲に開始する戰爭を容認する信仰なり、曾て獅子將軍と佛陀との間に戰爭に就いての問答あり、曰く「獅子將軍佛陀の御許に詣でゝいひけるは吾は軍人なり、世尊吾は王命を奉じて法を行なひ戰に從がふもの也、如來は限りなき親愛を敎へ總て惱めるものに同情を表して罪人の刑にあはんとするものをも救ひ給はんとするか、亦吾曾の家族及び財產を保護するため戰場に赴むくをも惡しと說き給ふか、如來は限りなき忍辱の敎へ惡人の來りて擅まゝに我を害ない吾が有てるものを奪い取らんとて强迫を試むるも默して之に從へと敎へ給ふか、如來は一切の正義の爲にせる戰をも悉く禁せんとし給ふか、佛陀答へていひたまはく如來は罰すべきものを罰し惡むべきものを惠めよと敎ふ、されど如來は同時に生けるものを害なはせ一向愛と親を行なへと敎ふ、是は決して相矛盾せる箴めにあらず、自ら犯せる罪に依りて刑に處せらるゝ

は裁判官の怨念によりて然るにあらず、罪人自ら招げるなり罪人は自ら犯せし罪科によりて法の爲に刑をうけざる可らざるに至れり、法官の處罰にあふとも罪人は誰をか恨むべき、自ら他を殺せば罪人よりて自らも殺されざるを得ざるに至れるは其身が爲せる行ひの果報を受くるにすぎず、若しこの罰にあふため其心を淨めらるゝことをしらば罪人も其危運を歎かず却つて喜こぶならん、佛猶語り給ひけるは如來は兄弟相爭いて互ひに斬り果さんとするが如き痛むべきわざなりと敎へされど彼の平和を保たんとてあらゆる手段をつくせる後義の爲に戰かふものを非難せざる也、唯非難すべきものは斯る戰を起せる人のみ也、如來は充分に我を伏して遺孽なからしめよと敎ふ、されど如來は人にせよ神にせよ自然界の力にせよ惡しき禍を起さんとするものを忍べよとは敎へざる也、戰爭はなかるべからず、この生何ものか事なからざらむ、去れど爭ふものは眞理と義とに逆ひて私心を退ふせんとするが如きことなからむを要する也、徒つらに功名を成し富貴を得んと思いて私心の爲に爭ふものは何の得る所あらんや、されど眞理と義との爲に爭ふものは大に得る處あるべし何となれば是の如き人は敗るるとも勝てる也、獅子將軍よ戰に赴むくものは義の爲と雖ども敵に殺さるべき覺悟は之なかるべからず是誠とに軍人の運命なり、よしさらば運命拙なくして敵に殺さるゝことあらんも慨き悲しびべき道理は之あるとなからむ、もし幸ひにして勝るものと雖も塵世萬事の常なきを觀せざるべからず其功は誠に大なるものならむ然り誠とに大なるものにもせよ生死の輪は轉じてやまざるべし、其身の塵となる幾何の日をか待ん、されど若其心を穩やかにして胸中一片の惡念を留めず敗衂たる敵の手を取り之を起して來れ「平和ならむ吾曾は兄弟となるべし」といふものあらば是人は永遠の勝利を收めたるものといふべし、何となれば其果報は躺りなきに存すべければなり、將軍よ戰かひに勝るものは大なりされど己に克てるものゝ更に大なるには如かず、將軍よ我に克てよと敎ゆるは其心を亡ぼせといふにあらず否之を保全せよといふ也、我に克得たるものは我に使はるゝものよりも能く其生を有ち其効を遂げ其利を收むるなり、我の妄執を離れたるものは生存競爭の戰場の立ちて斃るゝことなかるべし、義に適ひ正しきに合へる計畫は過まつことなし、其功は必ず成らん而して永く亡ぶることなかるべし、胸に眞理の愛を留めたるものは不生不死の水をのめるゆゑに死することなかるべし、さらば將軍よ決烈の志ざしを奮つて戰かへ勇猛の心を勵まして戰かへ、たゝ眞理の將士となれ、如來は汝に福を與ねん」と、かくの如きは南方佛敎に傳はれる佛陀の戰爭觀也若夫仔細に此を讀まば佛陀が如何にやみがたき合場に於て平和と義と眞理とを重んずる上に於て戰爭を容認せられたるやを見るべし南方佛敎は歷史的に史實を傳へたりと稱せらるゝものいかに佛陀の意思が原始的に見らるべきにあらずや、予は此佛陀の平和論、義論、眞理論が南無妙法蓮華經の信仰に

入りて始めてまことの平和論となることを信せんと欲す、若し日蓮上人の一切經は皆悉く壽量品の序分なりといふ一大判釋に隨がへば予は之の南方佛敎の佛陀の平和論を南無妙法蓮華經の信仰に入れる平和と見るにためらはず、平和を求むるに熱心なる信仰は平和をもとむる爲に戰ふ、淨土の平和を未來を理想する信仰は更に地上の平和を現實に得んが爲に戰かふ、南無妙法蓮華經の信仰は平和の信仰也、

平和の信仰に來れ而して此信仰に安心せよ、慈愛の信仰に來れ而して此信仰に安心せよ、勇氣の信仰に來れ而して此信仰に安心せよ、常に死すれども常に活きつゝある信仰に來れ而して此信仰に安心せよ、嗚呼南無妙法蓮華經の信仰は今やあらゆる全能を發展して帝國軍人の頭べに下れり、奮へ、戰かへ、予の信仰にある萬歳は南無妙法蓮華經是也、

和氣の詩趣

南山

講堂にて

三千の衆寂として風蕭る
講堂に法の風吹く涼しさよ
衣更へて法說く僧の美しき
本多上人の講話ききて
時鳥啼いて日頃の夢とけぬ

死の前

（敢て出征軍人に呈す）

木村義明

戰爭の悲慘であると云ふことは、歷史、物語などで讀むの外絕へて知らなかつた我等は、今回の日露の戰爭で、始て其如何計り慘鼻に堪へざるものであるかを知り得た、戰爭をしなければならぬ國民は、如何計り辛苦を嘗めねばならぬかと云ふこと、又た如何計り其苦痛を堪へ忍ばねばならぬか、又た其國民は如何計り不幸であるかを知り得た、更に又た、直接戰鬪線へ列りて、砲煙彈雨を冒して進む所の軍人は、如何にも氣の毒なる運命ではあるまいか、うれも其の千難萬苦の結果、芽出度凱旋の曉に於て、必ず胸間に金鵄勳章の光明を放つことが保證し得らるゝならば、軍人の運命も左程悲むべきものではないが、然し乍ら夫は平和時代の空想である、一旦戰列へ參加したる以上は、うんなことを夢みて居る暇はないのである、猛暴にして慘酷なる砲彈は、實に幾多の將士を容捨なく粉碎して煙雲も共に消へ去らしめる、此時に當ては實に空想も未來の夢もあつたものでない、希望多き少壯軍人をして如何計り哀れに墓なき短き運命に終らしむるかを、我等は眞實氣の毒に思ふのである、

今や滿州に於ける我征露軍は、連戰連勝の勢に乘じて深く敵地に侵入し、危險なる修羅場に出沒して、幾度となく自己の運命を覺悟したであらふか、而かも其運命を覺悟せなければならぬことに至た動機は全く我帝國を思ひ、我等同胞の榮辱安危に拘る大事件なることを知りて、國家の干城たる責任を重ずるの結果、斯くも其身其運命を犧牲に供したのである、我等は宗敎の信者として、其衷情の哀むべきを察し、其運命の墓なきを見ては、實に一片の同情を禁ずるを得ない、況や我忠勇武絕なる帝國軍人が、其氣の毒なる運命を思ふ度に、實に熱血の沸立つを抑ることが出來ない、玆に聊か、我等が得たる宗敎的安心談を以て、慰問の辭に代へるのである

「人生誰か死なからん」とは、能く人の云ふ語である、事もなげな語である、然し乍ら死は實際大問題である、其人の運命は夫て終るのである、最後の運命である、最後の運命である丈大事件大問題である、斯る大問題に逢着したる時は誰か一片躊躇の念、疑惧の念、恐怖の念を起さるものがあらふか、人間が死の前に向て、一種恐怖の念に襲はれるのは、最後の運命であるてふことを感じたる人情の自然である、尤もなことである、我等は死の前に向へる人々の、恐怖と煩悶とに向て、充分の慰藉と安心とを與へたいのである、

此人生の大問題に向て、人々に慰藉と安心とを與へんが爲めに、古の聖者は「人生誰か死なからん」と敎へたのである、此「人生誰か死なからん」をともなげに云ふてしまへば、極めて同情の薄き冷酷な語の樣に聞へる、然し乍ら之は眞理である、之眞理を敎て、理解力を以て人生の墓なき運命を悟らしめ、而してあきらめさせたのである、人間は死の前に進んだ以上は、如何に苦悶し、如何に煩惱し、如何に恐怖するとも、到底死は免るべからざるものである、如何に免れんとしても免るゝとの出來ないのは則ち死の運命ではあるまいか、人間が此運命を左右する力の無い以上は、あきらめるより仕方が無いではないか、あきらめてうふして自己の一身を運命に任して、煩惱、苦悶、恐怖の念を止めるより外に道がない

左れば古の聖者は、理解力の上より根本的に救はんとして「人生誰か死なからん」と敎へたのである、我等は能く其敎へを了解して居る、學者、宗敎家は勿論、政治家軍人、其他各級の人々如何なる無智の人も能く心得て居る、而して常に言ふて居る「人生誰か死なからんトウセ一度は死ぬものだ」と、

とは云ふけれども實際はうふはゆかぬ、能く理解して居て而も仲々あきらめきれぬのは如何であらふ、何となく矢張り不安の念に堪へぬ、何となく賴りない樣な心持がする、何となく暗黑の内へ行かねばならぬかと思ふ氣がする、實際は充分の安心を得て居らぬ、是ば如何云ふものであらふか、充分理解して居て而も安心が出來ぬとは、不安の念に堪へぬとは死して行く先の暗黑を取拂ふことが出來ないとは、餘りに腑甲斐ない樣である、何も死た先が必ず暗黑と決つた譯でない

が、如何も暗黒の樣に思はれる、よしや闇黒であつたにしろ人間一生の義務を終りて、「人生誰か死なからんや」の運命に任せて行くのであるから、何にも疾しき恐しき事はない筈である、けれども仕方がない、うふ云ふ理屈詰にはゆかぬ、全く人間の弱點である、死の後が闇黒で、其闇黒が非常に恐しく、其恐しき闇黒の中を獨りで行かねばならぬかと思ふたら誰でも恐怖の念に打たれずには居られぬ、苦痛を感せずには居られぬ、故に此闇黒を排除したくなる、然るに此闇黒を排除することが出來ず、又た如何にしても其排除の方法がないとしたならば、實に煩悶せずには居られぬ、決して死と決つた此世の人生を惜むのではない、然らば死の前の煩悶は、死することが恐しいのではない、死しての後が恐しいのである、「人生誰か死なからん」とは、人は死して此世と隔離せねばならぬと云ふことを說明したで、死しての後の運命を說明したのではない、現在の墓なさを敎へたのみである、未來の事實を知ることが出來ない、然るに人間は兎角未來のことが心配に成て堪へられぬ、此子は將來出世するであらふか、墮落するであらふか、社會の文明は如何程度迄進ひものであらふか、我國は將來益々富國强兵となりうるであらふか、日露の戰爭は將來果して完全なる勝利を得るであらふか、我は果して名譽の金鵄勳章を胸間にひらめかすの日を迎るを得るであらふか、此からの外交は愈々難關に向ひはしまいか、難關なる外交を當我局者は上手に切拔けて與れるであらふか、我若し戰死せば古鄕の父母妻子の悲みは如何であらふかと、夫は實に際限なく氣に拘る、此心配の起るのは確かに我等が心の事實である、又た之は人間として當然避くべからざる尤もな煩悶ではあるまいか、死が人生の大問題であると云のは全く是が爲めではあるまいか、人生の最も沈痛なる危悞は此に起る、人は死すべきものであると云ふだけでは、全く未來の賴りとはならない、未來の心配は依然として消へぬ、後の事、未來の事を心配するは杞憂である徒勞であるとは云はさぬ、よしや徒勞であつても、我等の心情は未來に向て安心を求めて止まぬ、人は未來を氣遣ふ動物である、人は未來の向上進歩を欲する動物である、人は光明を未來に求むる動物である、人はたとい現在の幸福を辞するとも、決して未來の苦痛と暗黒とを忍び得ぬ動物である、

今日は怠りても明日は必ず勉强せんと思ふ、今は如何に貧乏に暮すとも將來は必ず富豪に成らんと思ふ、人は現在の位置に滿足せずして、未來に向て愈々希望を充たさんとするではないが、人は未來的の動物である、見よ、我等が心と身体とは何れに向て働きつゝあるか、後の爲め、未來の爲めのみに就て行動しつゝあるではないか、日露の戰爭は、將來の利害得失を打算してからの衝突ではあるまいか、社會の風敎道德、國家の政治法律等あらゆる世界の經營は、現在の安寧

維持の爲めのみでない、全く將來の幸福を期するからである、死をいそぐの人も、生命を惜む人も、後の安樂幸福を期して居るのは同一である、然らば人間の最も大切なるものは命ではない、勿論金でも米でもない、後と云ふことである、將來である、未來である、今日以後である、今年以後である、今生以後である、「後」「將來」、「未來」は我等の生命である、今日も生命であれば明日も生命である、今年が生命ならば來年も生命である、今生活して居るのが生命であるならば、死後も同く生命でなくてはならぬ、何となれば、時間には今日明日今年來年の別ありと雖も、同く生命なるは一なり、我に今生後生の別ありと雖も、時間の生命の方には差はない、我等は過去、現在、未來の三世を通して、永久無傷に生命を持續するのである、

之永久無傷に存續すべき生命が、未來に於て、果して光明の開かるべきものであるか、或は暗黒の中に閉さるべきものであらふか、幸福を得るか、苦痛となるか豫め推測が出來ないとしたならば、是程心細いことはあるまい、我等が疑惧の念恐怖の念に充ちて煩悶懊惱するは、決して無理はないのである、あゝ、滔々たる天下の人は悉く死の前に向ては、疑惧恐怖の念を安ずることが出來ずに、煩悶し、懊惱して死するであらふか、我等もしかく苦痛を感じて死なねばならぬか、餘りと云へば生の寵愛に引代へて、死は殘酷ではあるまいか否！、否！、否！、

天下の人々の或者は死の前に來て、確かに未來の希望と光明とを認め、感謝と喜悅とを心に浮べて死するものがある、安心して後の生命に移るものがある、現在の幸福よりも多大なる幸福を期して行くものがある、彼等が死の前の精神狀態には、塵程の疑惧もなければ、露程の煩悶もない、實に平和で而して沈着て居る、彼等は死後に於て、猶一層の向上も進歩をもすると云ふことを信する力に依て、現在死の前に大安心を得て居る、死後の希望を有して居る、彼等の精神狀態は喜びに充ち、未來の光明を認めて居る彼等の眼中には微笑を湛へて居る、あゝ、彼等は如何にして未來の光明を認めたのであらふか、如何にして死後の幸福を期するを得たであらふか、我等は何事をさてをいても、先づ第一に此問題に向て研究を試みねばならぬ、

佛は敎て云く汝等佛を信せよ、而して其慈悲を賴めよ、汝等未來を疑ふ勿れ、我世に在らん限りは汝等を救はん、我は汝等の父なり豈に子を思はざらんや、我常に汝等を忘れたることなし、我は常に汝等と離れたることなし、我は常に汝等が心の中身の中に住む、而して我は常に汝等を支配して、能ふ限り汝等をして向上せしめ、進化せしめ、解脫せしめ、幸福を與ふ、又た我は汝等が行く何れにも存在せり、汝等若し衷心より我を呼ばゞ、我は直に汝等の前に顯れん、何となれば

我は生死を解脱して、死せもせず生れもせず、眞に常住不變の一大靈躰なればなりと

此語我等は常に聞いた、幾度も聞いた、されど今迄は現在の事に屈托して、未だ未來の事を氣遣ふ暇がなかつた我等には、此教は何等の感覺を與へなかつた、併しながら幾多人生の悲慘に打たれ、茫々として取り止めなき未來の事を氣遣ふに到て、煩悶の極は終に、何等かの者を把へて夫に信賴するを得たならば、我等は如何に安心であるかを想像するに至た宇宙萬有、有機無機、あらゆる一切の物は、何等かの强き力の爲めに支配せられ、夫に依て變轉遷移、向上進化すべきものであらねばならぬと考へるに到た、此心が起ると同時に、先の佛の教へなるものが突然耳に響ひた、而して我等が精神の奥底の琴線に接觸した、あゝ、此聲は我等に取て無上の福音である、其後我等は又た幾度となく此福音を聞た、聞く度毎に我等が胸の中に、清き泉の涌く如き心地がした、而して我等の未來は光明の輝くべく愈確實を加へて來た、今や我等は喜悅の念に堪へぬ、何となれば我等は明確に佛てふもの、存在するを認めて、其佛の慈悲の懷に安眠するを得るからである、換言すれば、我等が未來は悉く佛の救濟に委せて、一切人生の責任を免れたる如く、肩の重荷を下したる如き、心地を感じたのである、佛の慈悲の力に依て必ず向上、靈化成佛を期することを得て、我等は眞實慈悲の力を信ずることを得た、何となれば佛は我等の親にして、慈悲仁愛の充滿したる親は如何なる事情あるとも、決して其子を棄てないことを承知して居るからである、あゝ、期ゐ慈悲仁愛の親を有する我等は如何にも幸福ではあるまいか、我等は子として其父の總ての遺産を相續ぐべき權利がある、佛云「此れ實に我子なり、我は實に其父なり、全吾有する所の一切の財物は、皆是れ子の有なり」、（法華經信解品）

斯くして我等の未來は大富長者である、我等の後生は靈智靈能の覇王である、佛の積功累德を資本とせる銀行頭取である人間は未來的動物である、我等の現世は如何に不幸不運を以て充さるとも、未來の運命に光明を認め確實なる希望を得たならば、たとへ瀕死の前に臨まふが何等の憂懼する所があらふか、何の危疑する所があらふか何の躊躇する所があらふか寧ろ滿足と喜悅と感謝とを以て、勇みて死の前へ進むべきである、

要するに死の前に於て、疑懼憂惱する者と、安心滿足する者との差は、佛の慈悲救濟を信ずると、信せざるとの差より起るのである、我等は再び我等の注意を喚起さんとす、死は人生の最大問題である、死の前に向へる我等は如何に其心を持つべきか、人間の價値は其死の前にある覺悟如何にあると思ふ、幸に我等は未來に於ては多少の希望と光明とを有すれば、死てふ大問題の解決も左したる難事とは思はず、あゝ、宇

宙の靈！、佛陀！、我等は爾の慈悲を感謝す、

滿州の野にある軍人諸君よ、今や諸君は悉く死の前にあり諸君の心情は今や如何の感想をか生せる、雲の如き砲煙、雨の如き彈丸、風の如き殺氣充滿せる狂嵐の中に、劇烈慘憺たる一日の戰務を終りて、中宵半月の下、其戰友と團欒相語らふ時は、諸君は如何なる感慨に打たれるであらふか、凄ごき月の光が茫漠たる滿州の野をてらして、畫の慘憺たる光景が再び諸君の眼に映ずる時、諸君は如何に凄慘の氣に打たれるであらふか、而して諸君が明日の死を覺悟したる時、諸君の聯想は環り環りて、古郷の父母妻子に及びはしまいか、諸君の聯想が諸君の古郷に來る時は、諸君の血は如何に涌起るであらふか、諸君が胸中の暗涙は如何に溢れるであらふか、あゝ、諸君は親しき友を棄て、懷しき父母を棄て、戀しき慕しき妻を遺し子を遺して、刻一刻死の前に進まねばならぬ、人生の最も慘禍たる戰死を覺悟せねばならぬ、諸君の衷情は實に悲慘の極みである、我等が毎日勝利の快報を聞きつゝ、慘烈なる戰鬪報告を讀み、勇武なる諸君が行動を見る時は、實に一種の感慨に打たれるのである、更に諸君が內心の衷情を察し諸君の運命を思ふ時は、何とも云へぬ感慨に打たれて、思はず熱き涙を浮べるのである、あゝ、諸君、諸君は今や死の前に在る、諸君は如何に勇壯に裝ふとも、諸君も人間である諸君の衷情は必ず夢でなりとも古郷を思はずには居られない

而して自己の運命の拙きを歎くであらふ、されど諸君よ、死の前は大事である、不覺な取り給ひそ、諸君の現在の運命は如何に拙なくとも、未來の運命に光明の輝くを認めなば、何をか歎くことがあらふ、努め〳〵腦れ給ふな、我等は信ず、諸君は我等と同胞である以上は、我等の親は則ち諸君の親である、親は必ず其子を愛す、殊に運命の拙き子供に向ては更に一層の慈悲を加ふ、我等が靈界の親たる大本佛は、必ず我等と共に諸君を救ふてあらふ、諸君は諸君が衷心の憂情を止めよ、諸君の未來は必ず幸福あらん、必ず光明あらん、我等は保證す、諸君が死後に對する希望は必ず達することを得ると思ふ、諸君安心せられよ、諸君が別れを惜む所の、親しき父母、最愛の妻子、懷かしき朋友親戚は、未來の靈界に於て必ず相遇ふことを得るは疑ない、

あゝ、我等が信賴する佛陀！、久遠實成の大釋迦牟尼佛！我忠勇なる軍人諸君に向て、特に大慈大悲の光明を垂れ給へ！、南無妙法蓮華經！

（終）

小林老上人の熱情に咽びて

老躰の聲もなしまず啼くなめり

講話はて、歸るさ

講話果て、學校出る日傘哉

大日蓮の宗教より觀たる日露戰爭

窪田純榮

鬪諍殺戮を以て能事と爲す戰爭は確かに罪惡也、然れども理想なき平和論者の所言の如き無意義なる罪惡論に吾人は贊同するものにあらず、國家の安寧を維し世界の平和に貢献せんが爲に正義を戴き公道を踏みて貧弱無能の邦國を救援保護し殘逆貪婪なる暴國を膺懲すべく義によつて不得止に開かれたる戰爭は直ちに罪惡を以て斷ずべからざるは何人も異論なき處なるを吾人は信ず、日露戰爭の如き則ち此種に屬するを想ふべし、

彼の無道なる露西亞暴慢なるスラブ、正義を無視し公道を蹂躙して我隣邦の領域を侵略すべく多年經營したりし幾多の行動は、實に東洋の平和を攪亂せんと圖り延いて我帝國を累ひせんと企つるものにして其暴戾なる行爲殘逆なる動作は天人共に許さざるの暴狀なりとす、依之聖明文武なる今上陛下は宣戰の大詔を下し給ひ忠勇義烈なる百萬の我將士は海陸共に連戰連勝を重ねて彼をして再び立つ能はざるに至らしむること瞭乎として明らかなるにあらずや、是則ち陛下の御稜威と將士の忠烈とによるべしと雖、亦正義に抗し公道に敵すべからざる所以の事實を吾人に垂訓するものなるを三思三省すべきを要するなり、

教主釋迦牟尼佛は法華經に宣說して云く、『今此三界皆是我有其中衆生悉是吾子』と佛陀の敎法を奉戴遵守する吾人としては此の經典に示されたるが如く國の東西を異にし人種の系統を別にせるとに係はらず要は佛陀の敎旨遺訓に基き愛憎偏黨を捨て自他親疎を隔つべからざるや固より論ずるの要なきなり、然るに一向帝國の戰勝を懇願し敵國の敗衂降伏を祈願するは釋尊の敎旨に背き普遍の大慈を忘却せるは攝者矛盾の行動なりと謂者あらん、吾人は最も理由ある疑義なるを想ふ、固より覆戚間に棲息せる統ての生靈其如何なる國土如何なる民族なるとにかゝはらず佛陀の慈眼に映射せられたる其國土其生靈は皆是れ我有にして悉く是れ吾子なり故に親疎遠近を隔つべきにあらずと雖、姑らく正義の爲には以て邪惡を膺懲し公道の前には以て暴橫を以て誡責すべきは終始一貫萬古不動の通義にして吾人の戰勝を祈るの眞意又茲に存す

加之法華涅槃の大乘經典に於て佛陀は攝受に對して折伏の行軌を宣示し、以て吾人の歸趣を識らしむ、儻し夫れ日露の戰爭を觀じ來らんか、大聖日蓮の『現ニ折伏一時ニ成賢王一誡ニ責愚王ニ』と嗚呼此の聖判は今や事實となつて王帥堂々邪智誇法の惡國を懲伐す大法の爲國家の爲に滿身の熱血を傾注し吾人は本門の本尊に至誠の法味を捧げ國威宣揚敵國降伏を千祈萬禱して止ざるものなり、

『一閻浮提第一本尊可レ立ニ此國ニ』『日本國一向法華經國也』

とは嘗て大聖日蓮の吾人に垂訓せられたる妙判也、法華經には『我此土安穩天人充滿』と說き、涅槃經には『是大涅槃微妙經典流布處當知其地即是金剛』と說き、大聖日蓮は更に本地久成の圓佛は此の世界に在せり法華の行者所住の處は則ち淨土なり況んや本時の娑婆は三災四劫を離れたる淨土なるをや經には『我常在ニ此娑婆世界一我常住ニ於此ニ』と斯の如く達觀せられたる大日本帝國實に大日本帝國は本門の本尊の建立せらるゝ國也、一向に法華經の弘通せるべき國也、本地常住の妙國土也、本佛常在の寂光土也、微妙經典の流布する金剛寶土也、安養密淨瑠璃國の如き假境と大に異なれり、然るに毘摩質多の眷屬佉羅蹇駄の一類、憍慢の炎を吐き呑噬の瓜牙を鳴らし將に貧弱の隣邦を奪略して累を微妙常樂の日東帝國に及ぼさんとす、依之內には國家の自衛に鑑み外には同文の生靈を救濟せんが爲に、我忠勇なる百萬の將士は彼の帝釋の如くに金剛の杵を執り修羅の如き蠻魯の頭上に痛擊を加ふ、是則ち本地常住なる妙國土の靜寧を期し進んで諂曲無道の愚王を誡責する折伏行なりとす、而して此の大折伏は我帝國先天の任務を遂行するものにして、以て地上の平和に貢献するの大菩薩行なりとす、攻れば必らず取り戰へば必らず勝つ蓋し所以なくんばあらざるなり、

本佛の別付を受けて降世し宣傳せる大聖日蓮の宗敎は大日本國を以て、法華經流布の邦土と爲す、法華經流布の邦國は本門の本尊の建立せらるゝの國なり、本門の本尊の建設せられたる國は萬國に冠絕せるの邦土なりとす、斯は則ち法華經は宇宙無比の妙法にして本門の大本尊は絕待無上の統一權を有す特に一絲紊れざる連綿の皇統は優に萬國に超絕せるを以てなり、故に天は榮光を以て之を覆ひ地は平和を以て之を載す佛陀の我土安穩天人充滿と說き、神祖の天壤無窮と託宣し、大聖日蓮の三災を離れたる常住の淨土と判す、知らずや此三聖語の間に於て密かに吾人に默契を垂るゝものあるを、

我國を以て法華經の國なりと斷せる大聖日蓮の示訓を以て一私言と爲すことなかれ、菩薩彌勒は瑜伽論に於て東方の小國に大乘の機ありと論じ、肇公翻經の記には茲の典東北の小國に有緣なりと記し、安然和尙は日本國皆大乘を信ずと謂ひ、慧心僧都は日本一州圓機純一と書せり、吾人が大聖日蓮の我國を以て法華經の國なりと論斷せらるゝに、信伏隨從せる所以を窺ふに餘りあらん、

此の如く大聖日蓮の宗敎は大日本を以て法華經の國と定む而して其法華經は唯一無二の眞理なり、佛陀は以て諸經中王と讚歎し最爲第一と確說せらる、茲の最尊最勝なる妙典の弘まれる我國に無道の蠻力を以て寇せんと圖る暴國に向ては、吾人は眞理の爲に先づ敵國の降伏を望み、皇軍全局の大勝

を懇篤するは國民として論ずるよりも宗教家として特に萬祈を修せずんばあるべからず、

吾人は妙法の眞理を信じて深く我國家を愛せり、此の愛國觀は其根底を眞理の上に築けり、故に忍辱柔和の形相を一轉して眞理を守らんが爲には、直ちに武裝して折伏の態度を採らん、『護二持正法一者不レ受二五戒一不レ修二威儀一應レ持二刀劍弓箭鉾槊一不レ受二五戒一爲レ護二正法一乃名下大乘人護二正法一者上應三當執二持刀劍器杖一』と大般涅槃經に說ける佛陀の遺訓は遲疑せず以て南車とすべし、

然れども未だ武裝せざる吾人は奉公忠愛の大義に發奮激勵して一閻浮提第一の本尊に合掌拜跪し、一乘醍醐の法味を捧げ以て全局の大勝平和の克復に資せずんばあるべからず、大聖日蓮は『先祈二國家一須レ立二佛法一』と垂示し、『天の三光に身を温め地の五穀に神を養ふ皆是れ國王の大恩なり』と敎訓せらる最とも眷々伏膺すべきの聖論なりとす、

あゝ眞理の敵、帝國の仇、人道の賊、旭輝く日の本の妙なる法の御光りに消へも果なん醜草の葉末に置ける露の國よし玉のごと結ぶとも汝が夢の間の宿りなり、知るや知らずや無道の君眞理は最後の勝利者なるを、南無妙法蓮華經と我も唱へ他をも勸め、以て敵にも及ぼさんのみ、

雜報

●左の一篇は去月二十日、青山練兵場に於て常陸丸戰死者追吊會に列し、本宗東京寺院有志を代表し品川本光寺今成乾隨師が捧讀せるものなり、

謹んで常陸丸戰死者、須知中佐以下各將卒の靈を弔す、畏くも我　天皇陸下は、國家の獨立と東洋の平和の爲に、征露の軍を起し給ひしより、海陸並び進み所謂連戰連勝向ふ處敵なきに似たり、是を以て、戰ひ未だ半ならざるにも拘はらず、曩きに恐露病に罹りたる徒輩は一轉して嘲露病者と化せとんす、國家危險此の時より甚だしきはなし

年の五月、我將士は重要なる任務を帶び、多大の光明を懷き航海の途に就く、何ぞ圖らん敵艦突如として現はれ、諸勇士をして空しく骸を魚腹に葬るの止むなきに至らしめんとは嗟乎諸士の悲憤、國民の驚愕、何を何を以てか之に譬へん、於是乎戰勝に醉る國民は、忽爲として覺醒し、宣戰の詔勅に奉答する、猶ほ遼遠なるを自覺し擧國皆兵の國是を實現するに至れり、常人多く天諸士に災するを歎す、寧ろ知らん天我が國の光榮ある本分を全ふせしめんが爲に、假りに諸士をして死を現せしめ、人事を盡して後、始て天佑を與ふるの一大秘密を暗示せるとを、果して然らば諸士の顯界に於ける憤死は、却て是れ幽界に於る蘇生の妙事なりと謂つべきなり、大聖日蓮云く、妙とは蘇生の義なりと、是れ凡夫生死の夢醒て、神靈常住の境に住するを云ふ、更に之を顯本の妙義に照せば、彈丸硝烟の間、自ら金剛不壞の樂地あり、經に大火所燒時我此土安穩と說き火不能燒水不能漂と示すもの是なり、諸勇士、願くは本佛果海に浮へる妙法の旗艦に乘し、普現色身の力用を現はし、國民をして宣戰の大詔に奉答

するの光榮を得せしめよ、茲に所感を述て弔詞に代ふ

●備前和氣に於ける佛敎專門夏期講習會の概況

八月六日より同じく十六日まで備前國和氣に於て開會せられたる顯本法華宗を中心とせる佛敎專門夏期講習會の模樣を今同地周藤俊德氏より報し越したるが、同會は軍國多事の際にも係らず意外なる好成蹟にて連日熱心なる求道者を以て充されたるよし今順を追ふて記す處あるべし、

(1)八月六日此日一天晴れ渡り暑さこゝいは方なし、朝來同信會員中の有志者は講習會場の準備に忙かしく、和氣町の金碧樓松本樓其他の十數軒の旅館は一般講習會員の旅館に充てられ定宿の看板をあげ、小林、本多兩大僧正の旅館は本成寺方丈と定め、各僧侶の寓所は長谷町長の宅に設けられ午後に至れば講習會員は東京、廣島、播州、兩備、大阪よりは松尾忍水氏等續々と入り込み、午后六時四十一分と午後十一時十一分の兩度に小林日至及び本多日生師は侍者梶木日稱師を隨へて和氣停車場へ安着せられ、講習會及び同信會員の出迎をうけられ、車を驅りて本成寺に着き給ひぬ本成寺に於ては特に美作湯の郷鷺の溫泉をとり寄せ特に浴場を設置して、會員の便宜入浴するに任せたり、

(2)八月七日、午前七時、本成寺の梵鐘を合圖として會員一同は講習會場に充てられたる和氣尋常小學校に參集し、七時三十分、警鈴によりて小林、本多の兩講師及び會員八十名一同整列し、左の順序に依りて開會式を執行す、

一君　が　代　　會員一同起立
一法　歌　　和氣尋常小學校男女生徒
一開會の趣意　　發起人總代恒松傳之祐君
一祝辭演說　　會員
一答　辭　　會主吉田完亮師

一講題披露
一成佛論　　小林日至師
一日蓮上人の敎義一班　　本多日生師
一法　歌
一敬　禮
一散　會

(3)此にて開會當日の式を了れり

亦同日は同地方に行はれつゝある日曜講演會を和氣、赤磐兩郡の有志者に依りて和氣郡野吉村等尋常小學校内に於て開會せられ、本多大僧正の講話を懇請せしがば、式後本多講師は車を驅りて臨席せられ、

日蓮上人の人格　　本多日生師

といふ題下に二時間餘の大演說を試みられ、聽衆三百餘名皆悅服せる体なりし、聽衆は皆學問知識ある中等已上のものなりし由、

(4)八月八日、天氣好し、午前七時開會、

一日蓮上人の宗敎觀　　本多日生師

（日蓮上人敎義一班の一）

一成佛論　　小林日至師

右は何れも一時間づゝの講演にして、聽衆は此日七十餘名傍聽者數十名見受けたりし、

(5)八月九日、午前七時開會、此日も天氣よし、

一日蓮上人の宗敎觀　　本多日生師
一成佛論　　小林日至師

此日出席者前と異ならず、

此日午後七時本成寺に於いて布敎の目的にて講話會あり、やがて定刻に達するや、

一開會の辭　　吉田完亮師
一感　想　　林日法氏
一道一而已　　野老乾爲師

一末法應時法華益　小林日至師

聽衆無慮千餘名、盛會なりし、

(6)八月十日、此日天氣晴れ、殊の外暑し、

一成佛論　小林日至師

一日蓮上人の國家觀　本多日生師

（日蓮上人教義一班の二）

此日會員出席者七十名、傍聽者もありし、

此夜演說會を尋常小學校内に開く、午后七時開會、聽衆三百餘名あり、

一奮鬪せよ　梶木日種師

一二大宗教　大橋日曩師

一三力合成論　本多日生師

(7)八月十一日例刻開會す、會員滿堂、

一成佛論　小林日至師

（草木成佛に就て）

一日蓮上人の國家觀　本多日生師

此日兩講師岡山の演說會へ汽車にて赴き給ひ、翌日の朝の汽車にて歸和せられたり

(8)八月十二日、例時開會、聽衆前日と異ならず、

一日蓮上人の道德觀　本多日生師

（日蓮上人の教義一班の三）

一成佛論　小林日至師

（草木成佛に就て）

此夜、午后七時より小學校内に科外講演を開く、

一不受不施史談　梶木日種師

一蓮祖御祈禱の趣意　小林日至師

(9)八月十三日、例時開會、聽衆七十余名、

一日蓮上人の道德觀　本多日生師

一成佛論　小林日至師

（唱題成佛に就て）

此夜說教會を小學校内に開く、

一人生の願望　松崎事成師

一本佛感應の映射　能仁事一師

一如意珠　本多日生師

(10)八月十四日、晴、例時開會、聽衆前日の如し、

一成佛論　小林日至師

一日蓮上人の人生觀　本多日生師

（日蓮上人教義一班の四）

此夜、科外演說あり、

一絶待二善忠孝の融解　松尾忍水師

一苦を脫れんと欲すれは本道をゆくべし　小林日至師

聽衆三百餘名、法益轉々盛なり、

(11)八月十五日、此日天氣晴れて暑つし、例時開會す、

一日蓮上人の人生觀　本多日生師

一成佛論　小林日至師

聽衆前日と異ならず、

此夜、科外演說會あり、聽衆三百餘名、午后七時開

一佛教の二班　山名木信師

一救の手　本多日生師

(12)八月十六日、定時開會、此日滿講日なれは聽衆殊の外多し

一日蓮上人の宇宙觀及佛陀觀　本多日生師

（日蓮上人の教義一班の五六）

一成佛論　小林日至師

此日午前十時、何れも滿講となる、

此日午前十一時、警鈴とともに講師已下各會員何れも着席し、左の順序にて閉會式を執行されたり、

一君か代　會員一同起立

一勤行　一座

一結願文　本多日生師

一謝辭　能仁事一師

一謝辭　山本通辨師

一謝辭　松尾忍水師

一閉會の辭　吉田完亮師

一閉會演說　長谷川久造君

一法歌

一閉會

右式了つて各自休憩す、

午後一時より小林日至師本多日生師の慰勞を兼ねたる懇親會を小學校内に開く、列席者は五十餘名にして席定まるや、各員起立して兩講師の勞を謝し、了つて自己の抱負を語り亦は信念を告白し、又は領解をのべ、又は自ら住所氏名を名乘り知己をもとめ、愉快に謹肅に其會をとぢたりき、尙當日餘興として義太夫及び落語の催しありしよし、思ふに關西の講習會が二回とも滿足なる結果を以て了りたるは誠に喜ぶべきことにして、此に對して關東の寺院か由來安閑たるは腑甲斐なきことゝいふべし

今左に結願文及び謝辭等を掲載せん、

結願文

一心に敬禮し上る、本門常住の三寶聖衆知見證誠なさしめ給へ、玆に末法幼稚の願本法華の僧俗、東は東京、西は廣島より、此地に相會して、一旬の間妙法華經の大法を講演し讚揚し上る、其日子敢て永きにあらず、高遠の法門又未だ詳を悉くすに至らずと雖も、每朝の講演連夜の布敎、皆是れ正法正義の化導ならざるなく、隨て眞假の法益鮮少ならざりしを信ず、惟ふに此和氣の地に於て斯かる一大淨業を成辨したることは、蓋し過去數百年間に於て不惜身命の先師日經上人の遊化を除きては、之れに比す可きものなかるべきか、之れを思へば法の爲め此地の爲め豈に祝賀せざるを得んや、願くは此法益の及ぶ所、次第展轉して四方に至り、以て無邊の衆生を利導せんことを

今や此に魔事なく夏期講習會の結了を告ぐるを得、其閉會の式典を擧くるに際し、會員一統を代表し、恭しく三寶聖衆の護念感應を奉謝し上る、又願くば此の法蓮に參集したる僧俗は、內益々信仰と道念とを增進し、外能く法鼓を四方に擊て自他の迷闇を破り、到る所に二世安穩の華果を成熟なさしめ給はんとを

一心に敬禮し上る本門常住の三寶聖衆、知見證誠なさしめ給へ、南無妙法蓮華經

維時明治三十七年八月十六日　願本法華宗專門講習會員一統に代り

本化沙門日生敬白

閉會謝辭

玆に本宗夏期講習は、本日を以て成滿し、閉會式を擧けらる願ふに今や軍國多事の秋に際し、人生に於ける根本平和の原動力たる宗教の正邪を研鑽し、立正安國の聖訓に則り、各自信念の確立を圖るは、一に我宗學修習に依らざる可らず、本會は實に斯の必要に應じて起り、其講習旬日に亘りて小林講師は成佛論を、本多講師は日蓮聖人の宗教、國家、人生、宇宙、佛陀觀を論講せられたり、其精其微到り盡して余溫なし吾等此の周到懇篤なる教訓垂示に因りて、道念益々堅固に愈々確立し轉た歡喜に堪へざるなり、是れ全く兩講師の鴻賜にして又本會の德なりとす、

不肖等永く此法筵の功德を肝銘して忘失せず、各自聞法起信立行得果の四德を成せん、聊か謝辭を述べて閉會の辭とす

明治三十七年八月十六日　能仁事一

閉會謝辭

佛教專門夏期講習會は本日を以て滿了を告らる、旬日の講演日久しからずと雖も、講師兩聖閣下の廣博なる識見と明快なる辯舌とを以て、甚深微妙の大法、本門壽量の教義を講演せらる、參聽の會員能く胸中の邪念を一掃し、受持成佛の要義を了得し、堅固なる信念を增發せられたることゝ信ず、嗚呼講演の功大なりと謂つへし、請ふ會員諸士よ、堅固なる信念を相續し期臨終夕靈山往詣の大樂を獲得せられん事を、不肖

聊か蕪辭を草して閉會の謝辭に代ふ

明治三十七年八月十六日

謝辭

山本通辨

日蓮各宗團の聯合夏期講習會が龍の口に開かれ、次で伊東に開かれ、昨年は本宗專門夏期講習會を明石に開かれたるも、不肖の如きは宿緣薄くして遺憾ながら此れに會する事能はざりき、然るに本年は當和氣に開會せられ、不肖も列席するを得て小林本多二講師の高說を拜聽し、年來の遺憾此に晴るゝの思あり、心頓に淸快を感じ信念彌々增せしを覺ゆ、玆に聊か兩講師の敎恩と發起者諸君の御盡力を謝す

明治三十七年和氣夏期講習會閉會の辭

閉會之辭

大坂松尾忍水敬白

吾が和氣夏期講習會を本日は以て閉會を告ぐ、思ふに軍國多事の今日、和氣同信會支部が此の會を開催したる旨趣は、敎義の硏讚と俱に、國民今日に處するの覺悟を確立するに在り幸にして小林、本多兩大僧正は、遠く帝都より來錫ありて日夕親敎を垂れられ、他の講師各位も亦指敎の勞を執らる、吾人の慶幸何物か之れに加へん、只恐る本會の施設完たからざりし爲め充分所期を果し得ざりしとを深く懺謝に堪へざる處也、慈に發起者一同を代表し聊か講師閣下の敎恩を鳴謝し、併せて來會諸賢の信仰增進を祈る

茲時明治三十七年八月十六日

僧俗同信會和氣支部長　吉田完亮和南

●岡山に於ける夏季佛敎大演說會　岡山の地由來本宗熱心の信者を以て充たされ居ること丶て常に布敎に從事し僧となく俗となく敬虔なる士多かる中に僧には能仁事一師あり信徒には久城茂太郎氏あり以て兩々相扶けて敎勢擴張の事に熱心なるがさる八月十二日には本行寺に於て夏季佛敎大演說會を開會し辨士として當時和氣佛敎講習會に出席せられ居る本多日生上人小林日至上人を招待せり當日は篤信會の人々均しく準備に奔走し諸方へ廣告を配り且市內の紳士紳商へ案內狀を發したること丶て全市の評判殊に甚だし開會時刻午後八時といふに本堂は殆んと人を以て埋められ本多上人登壇前には聽衆の入場すること能はずして庭內に立ちて傾聽せるもの百餘名の多きに及びたりといふが以て其盛會なるを知るに足るべし當日は廣島より大橋日襲師の來り會し共に一場の演說を爲したるよしにて午後十二時閉會したるが近來盛會なりし由今其演說題を紹介すれは左の如し

開會之辭　能仁事一師

日露戰爭に就て　大橋日襲師

軍國民と宗敎　本多日生上人

軍國に於ける宗敎者の用心　小林日至上人

●廣島に於ける國繼會　さる八月十六日、廣嶋本照寺に於て國繼會を營みたりしが、此日天氣晴朗　爲めに參詣者殊に多く午后二時國繼會を修し、四時より演說會に移り、「開會の辭」を玉田義夫述べ、「所感」を天崎會溫述べ、「迷信の利害」を神谷喜太郎述べ、「讀安國論」を安國會員藤井俊龍述べ、「日本國躰と法華經の原理」を大橋日襲述べ、此にて當日を了り、翌十七日午後二時より同寺に於て戰死者追吊法會を擧行す、當日も參詣者前日に劣らず引續き詰めかけ狹からぬ本堂も流石に人を以て埋められぬ、法要の式了るや演說會に移り「開會の辭」を小田喜三郎述べ、「倶出靈鷲山」を天崎會溫述べ、「迷の說」神谷喜太郎述べ、「宗敎的安心」を藤井俊龍述べ、「心性の啓發」を島田顯恕述べ、「日本建國主義と日蓮主義」を大橋日襲述べ、此にて此日の演說會を結了し同時に散會を告げ、次には同郡高田郡吉田町蓮華寺に於て戰死者追吊法會及び國繼會を修行したるが參詣者百餘名同地として未曾有の盛會なりし由にて、法要後は演說に移り、「開會の辭」を天崎會溫述べ、「佛の慈悲」を提正晉述べ、「戰爭に就て日宗信徒の心得」を大橋日襲述べ、此にて此日の式を結了し、次は同月廿八日亦同寺に於て演說會を開き二百餘名の參會者あり、特に高田郡長天野氏の出席して演說をせらるゝなど一層盛大なりしよし、當日は「開會の辭」を天崎會溫述べ、「眞の孝行」を提正

晉述べ、「軍人と宗敎」を高田郡長天野兩石述べ、「救世の本濟力」を大橋日襲述べ、此日の演說會を結了したり、次は多治比大德寺に於て同月三十日戰死者追吊會を催し曇天なりしも八拾餘名の參詣者あり、法要後天崎會溫、堤正晉、大橋日襲の演說あり、次は井原村高源寺に於て三十一日九月一日の二日間追吊會及び演說會あり、信徒世良半三郎及び堤正晉、大橋日襲兩師の演說あり、連日の布敎運動多大の功果を收めたるよしに傳ふ

●伯耆通信　去七月十五日松崎本立寺に於て、戰勝大祈禱會を執行せらる、山陰にて僅かに本宗寺院二ケ寺の事とて、法要に就ての不便尠からず、されど幸に日蓮宗の寺院ヵケ寺あれば、今回の如き祈禱會には、各立正安國の祖訓に基き、互ひに相應援して淨業を修せるを以て、隨分盛大なる法會を擧行し得らるゝなり、廣告は松崎停車場を始め町の兩端に建札を爲し、表門には頗る大なる建札を立てたれば、當日往來の旅人なでも立寄て參詣せるを見たり、特に村長益田傳吉氏は役場より、出征軍人家族に通知せられたるとて、悉く參會して隨喜の意を表し更に僧侶側にありては、日蓮宗の新名定心、坂本惠大、瀧本慈精、本門法華宗の後藤泰信の各師にして、祈禱法會は午前一席午後一席を勤め、午後三時より演說を開會し

大魔日蓮の宗敎より觀たる日露戰爭　笹田純榮

此の演題にて寺主同師は、約二時間餘の廣長舌を振はれ、自他宗の參會者は大は感佩せるを見受けぬ從來本立寺にては、法會演說等の公開せられたるは稀なる由にて此日の法會及び演說は尤も注意を引きたりし由又當日の重なる參會者は、縣下屈指の富豪にして本宗の篤信家、市橋龜藏氏及び各分家一統、村長益田傳吉氏、收入役森田源重郎氏を始め、赤十字社員を始めとして無量三百名、夜に入り幻燈會を開き　聖祖の御傳記は瀧本慈精師、日露戰爭の映畫は新名定心師によつて說明せられ、是亦非常の盛會を極めて、午後十一時半目出度閉會を告げたり、因にいふ寺主崔田師も今や同地の情況が、粗ぼ明了となりたれば、大法の弘布に就て畫案せられつゝありと尙前記市橋龜藏氏より、今回先祖代々菩提の爲に、法華經十部、朱塗金金具經机拾脚、同導師机壹脚、打鳴臺壹個を本立寺へ寄附せられ、祈禱會當日始めて飾られたれば、本堂には一層の美觀を副へたるよし奇特の事といふべし

●千葉縣三敎區の祈禱會　同敎區は開戰已來熱心に戰勝祈禱及び演說會を開會し來たれるか、さる九月二日は同敎區押日來光寺に於て祈禱會を開き午后に入りて演說會を開きたるが辨士及び演題は、

妙法より見たる日露戰爭　大津賢淳

眞我發展論　古定・賢正

の二氏にして聽衆百餘名閉會せしは五時すきなりし

●千葉縣七敎區に於ける日露戰爭幻燈會　三上義徹氏の主唱に係はる幻燈會は七敎區內有志者河野笹川中村飛山池澤松井長谷川蒔田諸師の賛同を得て、八月一日菱沼尋常小學校に、全二日宮區尋常小學校に、全三日武射田區妙本寺に、全四日小關區妙覺寺に、全六日御門區妙善寺に、全八日家德區關德寺に、全九日藤之下區鈴木良助宅に、全十日本須賀區山中醬油店に、全十二日片貝區本隆寺に、全廿五日糞龜區淨泰寺に全二十六日粟生區篠崎吳服店に於て開會し每會參觀者は七百名已上に達し、非常なる盛會を極め三上氏の熱心なる說明は深大の感動を與へ軍國的國民の位地を自覺せしめたり、就中菱沼小學校長の如きは特に該幻燈を以て活ける心的敎育なりとの意味の演說を爲しぬ、以て其効果の大なるを知るに足るべし尙引續き開會の豫定なりといふ

豫告

統一

第百十五號　毎月十五日發行　定價六錢

發行所　淺草區南松山町四十五番地　統一團雜誌部

佛教統一は統一團の理想也信念也　雜誌統一は此理想と信念とを抱て現時の教壇に濶歩しつゝある一大雜誌也本誌は明治二十九年の創刊にして現時第百十五號を發刊せんとするの嘉運に到達せり佛教の眞の價値を認識せんとするものは本誌を讀まざる可らず教祖釋迦牟尼佛の本懐を知らんとするものは本誌を讀まざる可らず而して更に日蓮上人の佛教觀を知らんとするものは本誌を讀まざる可らず佛教に對する日蓮上人の眞の意思を知らんとせば本誌を讀め　**本誌は今の教壇に於て主義ある雜誌の一也**

第百十五號には　**主義**に本多日生師が和氣佛教講習會に於て講演せられたる「日蓮上人の教義一斑」と題する一大論文其内容は宗教觀、國家觀、道德觀、佛陀觀、人生觀、宗宙觀の諸項にして眞に佛教壇上近時出色の一大論文を掲げ　**講演**は坂本日桓師が八十歳の高齡を以て今春宗學院に於て講話せられたる　**諷誦章**をかゝげ　**研究**には古定賢正師が先に豫告したる「佛教教理史上に於ける金剛碑の位置」と題する論文及其他を掲載し　**論壇**には露國宗教の一斑を載せ　**法話**には故日達師の思運記を續載し　**史傳**には關田佛城師「の日蓮大聖人」をのせて益々佳境の記事に進み　**詞藻**には美文和歌俳文俳句漢詩及び劇詩小說の特に宗教的佛教的のものを擇びて載せ　**紹介**には辻文學士が帝國文科大學史談會に於て講演せられたる慶長宗論を載せ　**雜報**には各地團友の布教活動の有樣を詳細に報告し以て東西相隔つるも居ながら團友の消息を知らしめかくのごとく**各欄の精英を競ひ宗學の發達と期し布教の擴張を計り團友の消息を報し以て宗運の發達を期し護國の生命たらん事を期す**　乞ふ本誌の購讀をたまへ

前號「主義」欄、妙法蓮華經體用辨の正誤

頁	段	行	誤植	訂正
一	下	二	宜	宣
三	上	二一	一念の上に	「を加ふ
三	下	一八	解脫の下に	脫ノ義ヲを加ふ
四	上	九	辦	辨
四	上	九	留前の上に	「留を脫す
五	上	四	妙法蓮華經の下に	ノ五字の三字を加ふ
六	上	三	辦	辨
六	上	一〇	辦	辨
六	上	一三	顯示スル	顯示スルニハ
七	上	八、九、一一	辦	辨
七	上	七	辦	論
八	上	一八	辦	辨
八	下	八	辦	辨
九	下	三	辦	辨
一〇	上	八	睦靜	靜睦
一一	上	一〇	磐	盤
一一	上	一四	家	象
一一	下	七	實	宙
一一	下	七	正定	邪定
一一	下	九	ウ、ス	ウス、
一一	下	一〇	オヨ	オヨ
一二	上	三	ハシ	ハレ
		八	邊	數
一二	下	一四	觀	觀
一三	下	二	ノ	の
一三	下	三	自	身
一三	下	九	自	身
一四	下	二	三千化	化三千
一五	上	四	に	ニ
一五	上	一七	が	ガ
一五	下	一三	實	實
一六	上	三	膝の上に	膝のの二字を加ふ
一七	上	八	經用觀の下に	はの一字を加ふ
一七	上	一四	爲經	是れ
一七	上	一九	辦	辨

今釋迦尊者著　秘訣口傳　**說教演說指南**　全一冊　正價金廿五錢　郵稅金四錢

●在自用　期限　絕す

時に對する布教の新資料　統計　殊に現代大家の實驗應用せらるゝ戰

本書は縱横無盡に布教の材料を得べし且つ嶄新なる索引を付して、應用に便ならしむ

布教家の座右に缺くべからざるの實典なり　他の布教書必ずや後へに瞠若たらしむ

電話新橋二九七二番

千河岸貫一著　**軍人布教**　全二冊　正價金二十錢　郵稅金四錢

豫

光

第百十
毎月五十
定價六

發行所
淺草區南松山町四十五番地

歩し
して
釋迦
まさ
也

は宗
を掲げ

上に
載し

句漢詩
宗教的

以て東
くので

の
誌の購
まへ

布教大鑑は

●文章は通俗にして其儘の應用自在●

加藤咄堂新著 最新 應用說教學講義 全一冊 正價金三十錢 郵稅金四錢

歐國奮起戰鬪の時に當り布教は殿下の急務にして好材料に急用汲汲たらざる能はず、而るに所之れを以て悉練の布教家と雖も、尚ほ其材料の足らざるを憂ふ、本書は其缺を補はんが爲め曾く東西古今の書籍を探り、其取つて以て布教の料に供すべきものを蒐集し、佛教に關する詔勅を大集し、英雄、豪傑、高僧、碩德の逸事美譚數百を錄げ、典籍に佛教中の金言數百に各解釋を付し尚東西四古今の名士の格言を掲げて佛教の發揮に賞し尤も巧妙なる卑言諭は數の內問ほず、廣く、これを集め、和歌、俳句の趣味あるものに數百首の多きに達し史談には歷史上著名の事蹟を網羅して事に應用せしめ、なを添へて

(豫約特價)
前金に限る
郵稅金拾五錢
豫約價金壹圓

大內青巒居士校閱
加藤咄堂立案
三寶編輯局編纂

布教大鑑

全一冊 價金一圓五十錢 郵稅金十五錢

發賣所
東京市本郷四丁目 文明堂
京都市東洞院 村上書店
東京市內 京都、大阪 各地書肆

(申込期限)
明治三十七年九月三十日限り
出來期限十月二十日
期限後豫約謝絕す

今釋迦尊者著 秘訣口傳 說教演說指南 全一冊 正價金廿五錢 郵稅金四錢

便覽を示して佛教と對照し世界各宗教の大意と優劣とを示して佛法の顧揚に資し、諸種の統計を掲げては、世界の大勢、宗教、道德、法律等の現狀を一目の下に明白ならしめ戰時に對する新資料を網羅し盡して晴夜を問はず、何人といへども殊に現代大家の實塲應用のを主とするを以て縱橫無盡に布教の材料を得べし且つ嶄新なるにより一々索引を付して、應用に便ならしめたれば布教家の座右欠くべからざるの寶典なり他の布教書必ずや後へ一瞥を煩はしむ

實驗を補ひ智識の庫を開きては科學哲學等の

發行所 東京市飯倉五丁目 森江本店 電話新橋二九七二番

千河岸貫一著 全二冊 軍人布教 正價金二十錢 郵稅金四錢

岡山市上之町
柿屋太物店
店主 久城茂太郎

岡山市上之町〔電話貳六〇番〕
呉服商 柿屋本店
店主 久城茂太郎

京都市車屋町通柿之落上ル
柿屋本店京都染物部
店主 久城茂太郎

岡山市中之町〔電話壹五八番〕
柿屋鼈甲店
店主 宇垣卯三郎

岡山市上之町
柿屋蒲團店
店主 久城梅

岡山市上之町〔電話貳五五番〕
柿屋南店
店主 久城亀吉

岡山市車町通り
柿屋北店
店主 久城清吉

ポール・ルクルー著 大木スラー拙譯 佛陀の福音 全一冊 正價金五十錢 郵税金六錢

伊藤俊道著 釋迦實傳記 全二冊 大和綴洋製 正價金六十五錢 總ふりがな付 郵便金八錢

新刊 釋迦史傳 新刊

文學士清澤滿之同人著 靈界の偉人 全一冊 正價金三十五錢 郵税金四錢

近來印度哲學の勃興と共に釋迦牟尼佛の研究漸く盛に、その結果を公にせるもの亦少からず、然ども其の書多くは高尚にして專門家の參考に適するに非らずんば卑近にして兒女の讀ものたるに過ぎず、本書は能く此の兩者の中庸を得てすべて廣く南傳北傳の說を研究し深く古今東西の典籍を參酌し釋尊の傳を知らんと欲する者には最も適當なる良書なり、講述者は大學に於て哲學を專攻し爾後釋尊傳の研究に熱心なる常磐、近角、吉田の三學士にして

文學士 常磐大定先生
文學士 近角常觀先生
文學士 吉田賢龍先生 共述

菊版美裝全一冊 正價金三十五錢 郵税金六錢

製本出來

見を以て講述したる正確なる平易にして簡明別に一識者なれば簡明に

特色は釋尊の一代を太子時代の釋尊、修行時代の釋尊、說法時代の釋尊の三時代に區分し常磐學士の釋迦種滅亡論得意の部分を論述し而も卷を通じて論理整然たることたり卷尾には附錄として殊に本書の

たるを掲ぐこれ又多く得難きの文字學者之を讀まばその研究に少なからぬ資料を得べく、文士之を讀まばその思藻を豐富ならしむべく、詩家之を讀まばその想念を崇高ならしむべく、畫家之を讀まばその作品の參考となるべく、宗教家之を讀まばその道念を鞏固ならしむべし、志ある人速に一本を購て座右に供へよ

發行所 東京市麹町飯田橋新電話（二七九二）
發賣所 東京市神田區三崎町下院丁目 文明堂
東京市本郷區四丁目五番地 森江村上書店

加藤咄堂著 大乘佛教大綱 全一冊 正價金五十錢 郵税金四錢

統一

（明治三十年二月廿四日第三種郵便物認可　毎月一回
全三十七年九月十五日發行統一第百十四號　十五日）

（明治三十年二月廿四日第三種郵便物認可
明治三十七年十月十五日發行統一第百十五號毎月一回十五日）

第百十五號要目

○日蓮聖人の教義一斑……本多日生
▲清瀬真雄師の答辨を讀む……究竟生
○日什聖人賞文諷誦章卷上（第三回）……阪本日桓
▲守本僧正の宗門諫疏……
○佛教教理　史上に於る金剛錍の位置……古定寶正
▲鶴湖物語……海邊黒人
○日蓮大聖人（第十七回）……佛城開田養叔
▲雑司ヶ谷の詩趣……ふしん
○思連記（承前）……日達上人
▲各地教信……
○露國宗教の概觀……古定不新

御雛附ぞく
人形
小道具

武者人形
東羽子板

御注文に依り調製致候

東京日本橋通り十軒店
久月本店
中原福藏
（電話本局二千三百八十二番）

廣告

會計上整理の都合有之候に付誌代滯納の方は至急御拂込相成度希上候也

明治三十七年九月

東京淺草區南松山町
統一團

一本誌は毎月一回十五日を以て發行期日とす
一本誌は一冊六錢　十二冊前金六十五錢　郵券代用は一割増但五錢切手を其とす
一講讀申込の節は住所姓名を楷書にて認めらるべし
一爲替局は淺草區北松山町として爲振り込の事
一本團は別に領收書を發せず但し領收證を要する向は返信料を封入するか或は爲替振込の節拂渡濟通知料貳錢を振出郵便局へ納付すべし
一廣告料は五號活字廿七字詰毎一行金八錢なり

明治卅七年九月十五日印刷發行

發行人　井村恂也
編輯人　山根顯道
印刷人　鈴木暐學
印刷所　北澤活版所

東京市淺草區南松山町四十五番地
發行所　統一團

發行所東京市淺草區南松山町四十五番地
統一團